

# 寛元元年 『河合社歌合』 試注

新井早紀 井上麻由子  
庄部美希子 服部真衣  
濱田雄介 三好優希  
吉井佐織

## はじめに

『河合社歌合』は、寛元元年（一二四三）十一月十七日成立の歌合で、「冬月」・「千鳥」・「不遇恋」の三題三〇番からなる。出詠者は、藤原為家・蓮性・真観・藤原信実ら二〇名で、判者は為家。

尾道大学日本文学科専門演習の受講者は、平成二二年四月から、平成二二年七月にかけて毎週一番のペースで

『河合社歌合』の輪読を進めてきた。為家が初めて判者をつとめた歌合と目される点、また、蓮性、真観といった所謂、反御子左派の歌人達が、為家と袂を分かť直前に為家と席を同じくした最後の私的催しと目される点など、歌壇史的意義も小さくないが、未だ注釈的成果は管見に入らない。よって輪読の資料を基に、尾道大学中世文藝研究会のメンバーが再検討した結果を試注として公開し、大方の批正を仰ぐ次第である。なお、専門演習における各番の輪読担当者は以下の通り。

作者一覧―吉井佐織

凡例

〈冬月〉

一番―庄部美希子、二番―服部真衣、三番―濱田雄介、  
四番―井上麻由子、五番―原田佳美・太田悠斗、  
六番―新井早紀、七番―濱田、八番―原田・太田、  
九番―井上、十番―服部

〈千鳥〉

十一番―庄部、十二番―井上、十三番―新井、  
十四番―井上、十五番―庄部、十六番―新井、  
十七番―濱田、十八番―新井・井上、  
十九番―濱田、二十番―服部

〈不遇恋〉

二十一番―三好優希、二十二番―吉井、  
二十三番―濱田、二十四番―井上、二十五番―新井、  
二十六番―新井、二十七番―濱田、二十八番―井上、  
二十九番―栢木希望、三十番―吉井

判者巻末歌―三好

一、底本は、国文学研究資料館所蔵本〔タ2／81〕を用いた。

二、校合した諸本は、以下の通り。

書―宮内庁書陵部蔵歌合部類本

〔151／361〕〔新編国歌大観〕の底本

内―内閣文庫本〔201／177〕

刈―愛知県刈谷市立刈谷図書館蔵歌合部類本

〔1671〕

河―河野記念文化館本〔123／958〕

家―家郷隆文氏所蔵本

一、注釈は、【本文】【校異】を示した後、【他書所伝】

【本歌】【参考歌】【語釈】【通釈】をあげた。

一、底本の作者一覧の注釈は割愛し、作者については、

【解説】に記した。

一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。なお、虫喰いにより判読できない部分は□で表記した。

一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。

一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びA、B…

の符号を付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。

一、底本で文意不通などが認められる場合、他本の本文に拠り通釈を施した箇所がある。その際、【本文】

【校異】【通釈】において他本に拠った箇所に網掛けを施した。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、適宜『私家集大成』に拠った。その他の引用文献は、適宜底本を示した。なお引用本文には、適宜傍線、振り仮名などを付した。

一、『万葉集』については、本文、歌番号ともに塙書房刊『万葉集 訳文篇』を用いた。

作者一覽

河合社歌合

寛元<sup>A</sup>元年十一月十七日

題

冬月 千鳥 不遇恋

哥人<sup>B</sup>

左

前権大納言藤原朝臣為家

散位藤原朝臣信実

左近衛権中将藤原朝臣光成<sup>C</sup>

左近衛権少将藤原朝臣為教<sup>D</sup>

日吉祢亘祝部宿祢成茂

鷹司院兵衛督

藻壁門院少将

春宮弁

安嘉門院甲斐

能暹法師

右

沙弥蓮性

沙弥真観<sup>E</sup>

少将弟

正親町院左京大夫<sup>F</sup>

前丹後守藤原永光

左近衛権中将藤原朝臣為氏

沙弥円空

散位藤原朝臣行家

散位藤原朝臣為綱

中務大輔藤原朝臣為繼

【校異】

A ヲ一之(刈・河) B 哥人一作者(書・内・家)

C 左近衛権少将藤原朝臣為教一ナシ(刈・河)

D 少一中(書・内・家) E 観一親(家)

F 町一ナシ(家)

― 冬月 ―

〈一番〉

【本文】

① 冬月

一番

左

よそなから豊の明のこのころとおもひ出たる月そかなしき

右 勝

神代より霜ふりをける真榊のいやとしのはにすめる月かけ

左哥、題の哥とはきこえずして、そのことゝなき

様にみえ侍るにや、月そかなしきといひはてたる、

ことにみどころなく侍へし、右哥、真榊の霜に

すめる月、殊にとをしるく、神代までおもひやら

れてうるはしき姿に侍れば、一番の左とて、ゆる

さるへくもみえ侍らねは、右為勝

【校異】

A 大納言―大納(書) B 出―はて(書・内・家)

C いや―はい舞や(内) D かけ―哉(書・内・家)

E かなしき―かかなしき(刈・河)

F とをしるく―とをしるく(書・家)、とおろしく本(内)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【参考】

〈左歌〉

『和漢朗詠集』(山家)・五五五・白居易

蘭省花時錦帳下 廬山雨夜草庵中

『菅家後集』九月十日

去年今夜侍清涼 秋思詩篇独断腸

恩賜御衣今在此 捧持毎日拜余香

(本文は「日本古典文学大系」)

【語釈】

① 冬月―冬の月を題として詠んでいるものは、「冬の池の上は氷にとぢたるをいかでか月の空にいるらん」『古今和歌六帖』第一・三二五・「ふゆの月」などにみられる。勅撰集では「おほぞらの月のひかりしきよければ影見し水ぞまづこほりける」『古今和歌集』冬歌・三一六・「題しらず」・よみ人しらず」などが冬の月について詠まれた早い例。春や夏、秋の月ほどは歌題にとられていないものの、のちに「あまの原そらさへさえや渡るらん氷と見ゆる冬の夜の月」『拾遺和歌集』冬・二四二・「月を見てよめる」・恵慶)のように冬の寒さで冴えている月を氷に見立てて詠むなど、その荒涼とした美しさが評価され、平安中期から中世にかけて多く詠まれている。

②豊の明—豊明節会。新嘗会の翌日（陰曆十一月の中旬の辰の日、大嘗会ときは中旬の午の日）に行われる賜宴。宴の間に国栖奏や五節舞などが行われる。この年の豊明節会は十一月一日。くもりなきとよのあかりにあふみなるあさひのさとはひかりさしそふ（二度本）金葉和歌集』賀部・三一六・悠紀方朝日郷をよめる』・敦光）、「神うくるとよのあかりにゆふそのひかげかづらぞはへまさりける」『千載和歌集』神祇歌・二八四・久寿二年院御時、大嘗会悠紀方の神楽歌、近江国木綿園をよみ侍りける』・永範）のように、大嘗会の風俗歌に詠まれ、賀歌あるいは神祇歌に分類されるものもある。「雲の上やとよのあかりの月の色に日かげをそふるをみもとめ」（『夫木和歌抄』冬部三・七四四〇・同（宝治二年百首、豊明節会）・弁内侍）、「月さゆるとよのあかりの雲の上にとめの袖もひかりそへつつ」（『続後撰和歌集』冬歌・四九〇・（百首歌めされしついでに、豊明節会）・実雄）のように、「豊の明」の縁語「月」「日かげ」「光」などがちりばめられる。

③おもひ出たる—思い出した、思い起こした、の意。「おもひ出たる月」、「おもひはてたる月」などの先行例はみえない。ここでは、過去自分が参加した豊明節会を回顧するとともに、今年の節会には現官として参じることが叶わない心境を吐露したもの。豊明節会に参加できな

かった心境を吐露したものとしては、陽明文庫蔵「伝坊門局消息」に、定家の異母姉坊門局が豊明節会に呼ばれなかった無念さを書状にしたためた文書がみえる。「特別展陽明文庫・国宝展 近衛家一〇〇〇年の至宝」展示図録（平成22年）参照。

④霜ふりをける—霜がうつすらと降りている、の意。「霜」と「ふりをく」を詠み込んだ先行例としては、「有りときくうらの初しまほのぼのとふりおける霜に千どり鳴くなり」（『道助法親王家五十首』冬・七六二・（島千鳥））などがみえるが、「ふりをく」と言う表現は「霜」に対してよりも「雪」に対して多くみえる。「霜」に対しては「ふりをく」よりも「あきやまにしもふりおほひこのはちるともにゆくともわれわすれめや」（『家持集』一八八・（秋歌））のように「ふりおほふ」の方が多く用いられている。早春のすぐ消えてしまいう雪によく用いられる「ふりをく」を使っていることから、霜がすぐ消えてしまいうつすらと積もっている情景を描出する。

⑤真榊—榊の美称。常緑樹の総称だが、特に神事に用いる樹をさす。勅撰集では、夏や冬の歌として詠み込まれることもあるが、ほとんどは神遊びの歌・神楽歌・神祇歌に分類されている。時代が下ると、春や恋の歌に詠まれてもいる。常緑であることから神や御代の永代を讃え

る。冬の歌としては「雪ふれば嶺のま柵うづもれて月に  
みがけるあまのかぐ山」(『御室五十首』二八四・「冬歌  
七首」・俊成)などの先行例がある。

⑥「いやとしのは―「いや」は「いよいよ、ますます」の意。  
「としのは」に続き「月」を詠み込んだ先行例は、「みか  
さ山ふりさけみればさかき葉のいやとしのはに月はすむ  
らし」(貞永元年『名所月歌合』名所月・一番左・一・道家)  
がみえ、判者定家は「左、榊葉のいやとしのは、姿詞非  
凡俗之所及之由各一同申」と「勝」を付している。「あ  
はれのみいやとしのはに色まさる月と露との野べのささ  
原」(『拾遺愚草』春日同詠百首応製和歌・一三四〇・「秋  
廿首」)も先行例である。

⑦題の哥とはきこえず―題に即した歌としては聞こえない、の意。題詠の際、詠み込むべき歌題を落とすことは  
落題、題からはずれて詠むことは傍題といい、避けるべ  
き事であったが、左歌は豊明節会が主題ととれる内容とな  
っており、題であるべき「冬月」から外れた内容となっ  
ている事を難じている。類例は「雨ふれどかさとりやま  
のしかのねは中中よその袖ぬらしけり」(『六百番歌合』  
秋部・秋雨・一番左・三六一・季経)に対する俊成の判  
詞、「あめふれどとはいへれど、袖のぬれけるも鹿のね  
によりてときこえ侍れば、雨を題にてよめりとも不見に  
や」などにみえる。

⑧月そかなしきといひはてたる、ことにみどころなく侍  
へし―「月そかなしき」と言い切ってしまうことを難じ  
たもの。「そかなしき」という表現は先行例にも多く  
みられるものの、俊成、定家詠に比べ為家詠ではさほど  
みられる表現ではなく、断定的な表現を嫌つての評であ  
るか。

⑨とをしろく―俊成が「白雲と見ゆるにしろしみ芳野の  
吉野の山の花盛りかも」について、「させる秀句もなく、  
飾れる詞もなければ、姿うるはしく清げにいひ下して、  
長高くとをしろきなり」(『無名抄』本文は「日本古典文  
学大系」と説明していることや、『三五記』、『愚秘抄』  
に「遠白体」を「長高体」の属体として扱っていること  
などから、「長高し」に近い、雄大・壮大の美をいう語  
とみられる。「おしなべてゆきのしらゆふかけてけりい  
づれさかきのこず多なるらん」(承安二年『広田社歌合』  
社頭雪・四番左・七・実国)について俊成は、「左歌、  
ゆきのしらゆふかけてけり、といへるころすがたまこ  
とにとほしろく、よままほしきさまにも侍るかな」と判  
じている。

⑩うるはしき姿―歌全体が良く整って調和のとれた美し  
い情趣、の意。「君がよのためしにすめる石清みづなが  
れ久しきかげはみゆらむ」(宝治元年『院御歌合』社頭祝・  
百廿番左・二三九・通忠)に対する判詞「左うた、すが

たうるはしく、ことよろしくみえ侍るにや」にみえるように、「うるはし」はよく整つて調和のある美しさを言い、「姿」は一首全体から生じる情趣などをさす。

① 一番の左とて、ゆるさるへくもみえ侍らねは、右為勝——一番の左の歌だからといって、許されるべきとは見えませんので、右を勝ちとする、の意。歌合において一番左歌は高貴な者、主催者が位置するため、一番左は「勝」または「持」とする不文律が出来ていたにもかかわらず、この左は一番左であっても「勝」または「持」とするに値しないと評している。なお、一番左が負けとなった歌合は現存するものうち、『寛平御時中宮歌合』をはじめとして、永承四年『齋院歌合』、承暦二年『内裏後番歌合』などに確認される。

【通釈】

一番 冬月

左

前権大納言藤原朝臣為家

(官職についていない自分には) 関係ないことだけれども、(かつては自分も現官として参じた) 豊明の節会がこのころだと思ひ起こした(きつかけである) 月が(私には) 悲しく感じられることだなあ。

右 勝

沙弥蓮性

神代から霜がうつすらと降りている(河合社の) 榊に(差している)、いつそう年を経ることに澄んでいる月の

光だなあ。

〔判詞〕 左歌は、題に即した歌としては聞こえず、そのこと(冬月題の歌で) はないように見えるのではないでしょうが、「月そかなしき」という形で終わるのは、とりわけ見所がないでしょう。右歌は、榊の霜に澄んだ月というのが、とりわけ壮大で美しく、神代まで想像されて歌全体が調和がとれていて美しい情趣がありますので、(左歌は) 一番の左の歌だからといって、ゆるされるべきとは見られませんので、右(歌) を勝ちとする。

〈二番〉

【本文】

二番

左

散位藤原朝臣信実

右 勝

さえあかす杜の嵐に空晴て月は木の間の冬かれもなし

沙弥真観

をき出て又こそみつれ冬の夜に澄かへりたる山の端の月

左、杜の月嵐にはれ、冬かれなき木の間の、おもかけ

あらはに侍るを、さえあかすと侍や、させるよう

なく侍らん、右、又こそみつれとをきて、澄かへり

たる

山の端の月、誠におほろけならず侍れば、猶右勝

と申へし

【校異】

A は一の(書) B 真観—真親(家)

C をき出て—おきめて(家) D 澄—<sup>澄イ</sup>きえ(書)、さ

え(内)、澄(刈・河)、消(家) E 木の間の—木のまま

の月(書・内・家) F よう—よせ(書・内・家)

G 澄—<sup>澄イ</sup>きえ(書・家)、さえ(内)、澄(刈・河)

H 侍れ—見え侍れ(書・内・刈・河・家)

I 猶右勝—勝(書)、猶勝(内・家)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』冬部中・冬月・五三八八・「河合社歌合」・

真観

おき出でてまたこそみつれ冬よにすみかへりたる山の

はの月

【語釈】

①さえあかす—「こぬよのみとこにかさねてからころも

しもさえあかすひとりねのそで」(『聞書集』二五四・冬

夜恋)のように、冷え冷えとした夜を明かしゆくさま

を表す。

②杜—ここでは賀茂川と高野川の合流点にある糺の森を

さす。

くしの秋はきにけり」(『古今和歌集』秋歌上・一八四・「題しらす」・よみ人しらす)の如く、月の光が木の間から差し込む様を表現する。

④冬かれ—冬になって草木の葉が枯れること。また、そのながめの寒々としてもさびしい様子。月とともに詠

まれている例は、「冬枯の蘆間にすだく鴛鴨のはらはぬ霜や寒ゆる月影」(治承三年「治承三十六人歌合」月前

水鳥・十三番右・二五六・覚盛)が早い。当該歌合以前に詠まれた例はあまりみられない。

⑤澄かへり—「すみかへり」では、「神代より名にながれたるいはし水むかしに今ぞすみかへるらむ」(『宝治百

首』雑二十首・三九四二・「寄社祝」・為継)や、「吹く風も音をしづめて久かたの空すみかへるあきのよの月」(『竹風和歌抄』六三七・「秋」)のように、雑歌や秋

歌でしか詠まれていない。「さえかへり」では、「しぐれつるよひのむら雲さえかへり冬ゆく風に霰ふるなり」(『壬二集』冬部・二五六六・「建暦二年仙洞廿首歌奉り

し中に、冬歌)」と、冬歌で詠まれている。「さえかへり」とすると、歌題「冬月」にそぐわず、また「月」が

「さえかへる」先行例もみえない。よって今回は、当該歌が冬歌として詠まれていることも考慮して異本注記に従う。判詞も同様に改めた。

⑥おもかけ—詩的イメージ、あるいは視覚的映像とし

てとらえられた情趣。「老のみにくるしき山のさか越えてなにとよそなる花をみるらん」(宝治元年『院御歌合』山花・廿六番右・五二・為家)に対して、為家は自ら、「右くるしき山のさか越えてと凡卑のすがた、たとへば爪木おへる山びとの、なほしも花のかげをさりてよそにみたるおもかげ、甚みぐるしく侍るにこそ、尤為負」と判じている。

⑦ようなく―それほど必要がない、の意。当該判詞では、初句「さえあかす」の意味内容と、二句から結句までの「冬月」の描写とに重なりが見られることを指摘する。例えば、「白露の手枕ののをみなへし誰とかはせるけさの名残ぞ」(建長三年『影供歌合』朝草花・六十番左・一一九・経平)について、為家は「白露のたまぐらのの、めづらしくもとめ出だされて侍れど、名所又ようなきうへに」と判じている。

⑧おほろけならず―並一通りでない、格別だという意味。ここでは、「ゆふづく夜ともしき影をみる人の心はそらにあくがらしけり」(元永元年『内大臣家歌合』暮月・一番右・二四・兼昌)に対する顕季の判詞、「右歌、いうなり、いますこし心ちあり、おぼろけなり」のように、「朧月」に言葉を響かせている。

【通釈】

二番

左 散位藤原朝臣信実

一晚中寒々とする(糺の)森に吹いた強い風によって空が晴れて、月の光が洩れ落ちてくる(糺の森の)木の間に冬枯れありません。

右 勝 沙弥真観

起き出してもう一度(わざわざ)見ました。冬の夜に澄みきった山の端の月を。

〔判詞〕左(歌)は、森を照らす月が強い風によって(空が)晴れ、冬枯れのない木の間に洩れ落ちる月(の光と詠むの)は、歌の情景がはっきりわかりますのに、(それに加えて)「さえあかす」とありますのは、それほど必要がないでしょうか。右(歌)は、(上の句に)「又こそみつれ」と置いて、(下の句に)「冴かへりたる山の端の月」(と詠むことは)、(月が澄みきっている様が)誠に格別でございますので、右(歌)が勝ちと申そう。

〈二番〉

【本文】

三番

左 持 左近衛権中将藤原朝臣光成

冬かれのたゝすのもりの木の間よりみたらし川にやとる

月影

右

少将弟

冬くれば月のかつらも木枯にまはらなればやかけのさひしき

右歌、詞つゝきやすらかにいひくたし<sup>B</sup>てよろしく侍るを、左、社頭月おもかけ侍れば、おとると申かたし<sup>C</sup>、  
為持

【校異】

A 少将弟―ナシ(刈・河) B いひくたし―いひてたし(書) C おとると―をと(刈・河)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』冬部中・冬月・五三八九・同(河合社歌合)・

少将弟

冬くれば月のかつらも木枯にまばらなればや影のさびしき

【本歌】

〈右歌〉

『古今和歌集』秋歌上・一九四・「これさだのみこの家の歌合によめる」・忠岑

久方の月の桂も秋は猶もみぢすればやてりまさるらむ

【語釈】

①たゝすのもり―糺の森。山城国の歌枕。下鴨神社と撰社河合神社がある。ここでは特に、河合社を意識していると思われる。「糺」を糾明する意の「ただす」に掛け

て詠まれることが多く、神社の前で偽りや濡れ衣を糾したいというような内容のものが多し。勅撰集初出は、『新古今和歌集』の「いつはりをただすのもりのゆふだすきかけつつちかへわれをおもはば」(恋歌三・一二二〇・みやづかへしける女をかたらひ侍りけるに、やむことなきをとこのいりたちていふけしきをみて、うらみけるを、女あらがひければよみ侍りける)・定文。

②みたらし川―御手洗川。神社の近くを流れ、身を清めて参詣するための川。ここでは、糺の森の中に流れている御手洗川を指す。

③月のかつら―中国古代の伝説で、月の中に生えているという桂の木。「もみちする時になるらし月人の楓の枝の色付く見れば」(『万葉集』巻第十・秋雑歌・二二〇二・よみ人しらず)という歌の発想は、前掲本歌に活かされており、さらに忠岑歌の、秋に月の光が一層照り輝くのは月の桂の木が紅葉するからだろうという発想は、後世に影響を与えた。「なにとなくながむるそでのかわかぬは月のかつらの露やおくらん」(『千載和歌集』雑歌上・一〇一三・「賀茂社後番歌合に、月歌とてよめる」・親盛、「秋の色をはらひはててや久方の月のかつらに木がらしの風」(『新古今和歌集』冬歌・六〇四・二十一首歌たてまつりし時)・雅経)、「白妙の光ぞまさる冬の夜の月のかつらに雪つもるらし」(『宝治百首』冬十首・

二二七八・「冬月」・後嵯峨院）などがその例。

④詞つゝきやすらかにいひくたして―「詞つゝき」は、ことばの続きぐあいのこと。「いかにせむわくるもをしきながめかな花のをりしもかへるかりがね」〔千五百番歌合〕春三・二百二十番右・四四〇・越前）に対する俊成の判詞、「右歌、わくるもをしきといひ、花のをりしもなどいへる詞つづき、やすらかにいひくたして宜しくきこえ侍るにや」にみえるように、詞続きがなだらかであることを評価する。『詠歌一体』歌のすがたの事」に「詞なだらかにいひくだし、きよげなるはすがたのよきなり」とある。（底本は「日本歌学大系」）

⑤社頭月おもかけ侍れは―神社を照らす月。ここでは、河合社を念頭に置く。「やはらぐるひかりやそふるいはし水うつれる月のいとどくまなき」（正治二年『石清水若宮社歌合』月・廿一番左・一七三・伊綱）に対する判詞、「左社頭月なれば勝ち侍るべきにや」のように社頭月を詠み評価された例がみえる。

【通釈】  
三番

左 持 左近衛権中将藤原朝臣光成

冬枯の糺の森の木々の間から、御手洗川に映り込んでいる月の姿よ。

右 少将弟

冬が来たので、（あの忠岑の歌に詠まれた）月の桂も、木枯によって、葉がまばらになっていてからであろうか。月の光が寂しいことだ。

〔判詞〕右歌は、詞の続け方を自然にすらすらと言っていてよろしくございますもの、左（歌）は、（河合社の）社に月が出ている情景が目には浮かぶような情調がございませうので、劣っているとは申し上げにくい。持とする。

〈四番〉

【本文】

四番

左 持

左近衛権少将藤原朝臣<sup>A</sup>為教<sup>B</sup>

①夜をさむみ氷るをさゝの霜の上に影さやかなる冬の月かな

右

左京大夫

②袖寒てねなくに明ぬ冬のよをいかにさひしく月も澄らん

左、下句はよろしくみえ侍るを、氷るをさゝと侍、つ

つきても聞えずや、右哥、月もすむらむと侍、

おもひやりたる様にて本意侍らねと、又おなし

ほとと申へくや

【校異】

A 少将―中将（書・内・家） B 朝臣―ナシ（書）

C やり―やる（家）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①夜をさむみ―「夜をさむみ朝戸をあけて出でぬれば庭もはだちに雪ふりにけり」(『人丸集』一六〇)、「夜をさむみおくはつ霜をはらひつつ草の枕にあまたたびぬぬ」(『古今和歌集』羈旅歌・四一六)、「かひのくにへまかりける時みちにてよめる」(躬恒)などのように、「夜が寒いので」の意。

②をさゝ―小篠。篠をいう雅語。「わけきつるをさざが露のしげければあふ道にさへぬる袖かな」(『千載和歌集』恋歌三・八二二)、「寄催馬楽恋といへる心をよめる」(伊経)、「いその神ふるのをさざ霜をへてひとよばかりに残るとしかな」(『新古今和歌集』冬歌六九八)、「だししらず」(良経)などが例。

③袖寒て―「袖寒て」は単に寒さを表すときにも多く使われる詞だが、男女が互いに袖を敷き交わして共寝したことから、「袖を片敷く」、「片敷きの袖」などとひとり寝の寂しさを詠む場合にも使われる。「袖かはす人もなき身をいかにせむ夜さむの里に嵐吹くなり」(『永久百首』秋十八首・二六七)、「嵐」・頭仲)、「きくままにかたしく袖のぬるるかなしかのころには露やそふらん」(『千載和歌集』秋歌下・三二八)、「鹿のうたとてよめる」。

季能)などがその例。

④ねなく―「音泣く」と「寝なく(寝ないのに)」を掛ける。「思ひつつねなくにあくる冬の夜の袖の氷はとけずもあるかな」(『後撰和歌集』冬・四八一)、「題しらず」・よみ人しらず)などが例。

⑤明ぬ冬のよ―「ぬ」を打ち消しの助動詞の連体形として、「冬のよ」に意味的に掛かると解した。「なくさまぬなかきおもひはつきもせてねなくにあけぬ秋のよの月」(『為家集』三七六)、「秋」)が例。

⑥澄―「われひとりながむとおもひしやまざとに思ふことなき月もすみけり」(『後拾遺和歌集』恋四・八三四)、「題不知」(為時)のように、「澄む」と「住む」を掛ける。

⑦つつきても聞えず―「つつき」は、詞の続け具合のこと。ここでの「聞えず」は詞の続き具合が耳障りだという聴覚的なことではなく、「氷るをさゝ」という表現が下の句との関連が薄いことを難じるか。

⑧本意侍らねと―題の本意からの逸脱を難じている。為家の判詞では、「したの帯のあだにむすびし中なればめぐりあふべき限だになし」(宝治元年『院御歌合』逢不遇恋・九十二番右・一八四)、「小宰相」)に対しても、「右したの帯あだにむすびしなどは、さもやとみえ侍るに、下句かぎりだになしとて、恋のころいまはおもひすてたるやうにみえ侍る、題の本意侍らねば、尤為負」とみ

える。

【通釈】

四番

左 持

左近衛権少将藤原朝臣為教

夜が寒いので凍っている、篠に降りた霜の上に、光の

明るい冬の月であるよ。

右

左京大夫

袖が冷え冷えとして、(寂しくて) 声を立てて泣き、

眠ることもできないまま、それでも長く明けもしない冬

の夜に、(天上では、自分と同じように) どんなにか寂

しく、月も空に(ひとり) 澄(住) んでいることだろう。

〔判詞〕左(歌) は、下句はだいたいよく見えますのを、

「氷るをさゝ」とありますのが、続き具合よくすらすら

と読み下しているようにも聞こえませんか。右歌は、

「月もすむらむ」とありますが、(実景をみるのでなく)

想像しているようで(題の) 本意から外れておりますけ

れども、やはりまた同じ程度と申し上げましょうか。

〈五番〉

【本文】

五番

左 勝

日吉祢巨祝部宿祢成茂

天の河もみちのはしはとたえして氷り<sup>②</sup>をわたす冬のよの月

右

前丹後守藤原永光

さえ渡る冬は氷のことはりをみつなき空<sup>A</sup>にすめる月影<sup>B</sup>

右、氷<sup>C</sup>のことはりを水なき空<sup>D</sup>にすめるといへる、

少いかゝと心えかぬるやうに聞え侍るにや、左、銀

河<sup>E</sup>やすくいひくたして侍れば、氷を渡す冬

の月影<sup>F</sup>、猶<sup>G</sup>さえまさると申へし

【校異】

A みつ―つれ<sup>水敷</sup> (内・家) B に―の<sup>に敷</sup> (書・内)、の (家)

C 右―右の (書・内・家) D いへる―云□ (家)

E と―ナシ (書・内・家) F 心え―とけ (書・内・

家) G さえ―きえ (書・内)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①天の河もみちのはし―「天河紅葉をばしにわたせばや

たなばたつめの秋をしもまつ」『古今和歌集』秋歌上・

一七五・「題しらず・よみ人しらず」の如く、秋になり、

散り敷かれた紅葉が天の川にかかる橋のようになるとい

う発想に基づいた表現。

②氷りをわたす―「天河氷によどむ風さえて行く方おそ

き月ぞひさしき」『拾遺愚草』冬・二四五〇・「承久元

年七月内裏歌合、冬氷月」のように、天の川は冬に凍

るものという発想があり、当該歌でもそれを踏まえるか。

③氷のことはりを―「氷のことはり」という言葉は先行例はみえないが、ここでは「さえわたっている冬は水が凍るのが自然の摂理である」という意で詠まれていると考えられる。

④みつなき空―「さくら花ちりぬる風のなごりには水なきそらに浪ぞたちける」〔古今和歌集〕春歌下・八九・亭子院歌合歌・貫之）では水が存在するはずのない空に舞う桜の花を浪に見立てていることを強調するためか、えて「みつなき空」という表現を用いている。当該歌では、「水」と関連が深い「氷」が詠みこまれているために「みつなき空」という表現を用いていると考えられる。

⑤氷のことはりを水なき空にすめるといへる、少いか―右歌の「氷のことはりをみつなき空にすめる」という表現が意味として充分には理解しがたいことを難じたものの。

⑥やすくいひくたして侍れは―すらすらと滞ることなく、読み下すことを評価したもの。「白妙の袖師のうらによる波のかずさへみえて月ぞさやけき」（宝治元年『院御歌合』海辺月・六十一番右・一二二・雅忠）に対して為家は「右はやすくいひくたして、やうかはりたる、持とみえ侍にや」と判じている。

【通釈】  
五番

左勝

天の川の紅葉の橋は途絶えてしまつて、（今は月光がさして）氷（月の光で凍っているように見える橋）を渡している冬の夜の月だなあ。

右

前丹後守藤原永光

辺り一面が冷え切る冬は凍るのが自然の摂理であることを、水がない空に澄んでいる月だなあ。

〔判詞〕右（歌）の、「氷のことはりを水なき空にすめる」というのは、少しいかがだろうかと理解しがたいように聞こえましようか。左（歌）、銀河を滞ることなく、すらすらと表現しておりますので、「氷を渡す冬の月の光」のほうが、いっそう冴え勝っていると申そう。

〈六番〉

【本文】

六番

左 持

兵衛督

①常盤なる木の葉かくれはかはらねと月は冬社寒まさりけれ  
A

右

③左近衛権中将藤原朝臣為氏

②敷妙の衣手さむし冬の夜に雪けさえたる山の端の月

④月は冬こそといへるふることも、ときはなる<sup>B</sup>とて

は、誠に木の葉かくれ、こゝろも籠<sup>C</sup>て珍敷みえ侍る

へし、雪けさえたる山の端の月、さしたるとか

なく見え侍れば、暫<sup>h</sup>為持

【校異】

A けれーけり (刈・河) B なるーなを (書・内)

C 籠て珍敷みえーナシ(家) D 暫ーナシ(書・内家)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』冬部中・冬月・五三九〇・「同《河合社歌合》」・

兵衛督

ときはなる木のはがくれはかはらねど月は冬こそさえまさりけれ

〈右歌〉

『題林愚抄』冬部中・冬月・五三九一・「同《河合社歌合》」・

為氏

敷妙の衣手さむし冬のよの雪げさえたる山のはのつき

【語釈】

①常盤なる木の葉かくれー枯れることなく生い茂っている木々によって辺りが見えない様子であること。「常盤なる」には「ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり」(『古今和歌集』春歌上・二四・「寛平御時きさいの宮の歌合によめる」・宗子)のように、松や榊に続く例が多く、ここでは河合社のある札の森が恒久であることを讃える意を含む。「木の葉かくれ」は物が樹木の枝葉の茂みの蔭になつて見えない状態である

ことをいい、「おく山のこのはがくれにゆく水のおと聞きしより常にわすれず」(『古今和歌六帖』第三・二四六三・「水」・伊勢) などがある。

②敷妙のー枕詞。寢床に敷く布の意で、「床」、「家」、「枕」、「衣」などにかかる。「しきたへの衣手離れて我を待つとあるらむ児らは面影に見ゆ」(『万葉集』卷第十一・正述心緒・二六〇七) はその一例。

③雪げさえたるー雪が降りそうな気配で冷え冷えとしている様子。先行例としては、「むれてたつ空も雪げに寒えくれて水のねやにをしぞなくなる」(『正治初度百首』二六七・「冬」・式子内親王) などが挙げられる。

④月は冬こそといへるふるごとー「ふるごと」は昔あったこと、故事を指す。冬の月は平安時代半ば頃から積極的に称揚されており、「冬の夜の澄める月に雪の光あひたる空こそ、……おもしろさもあはれさも残らぬおりなれ」(『源氏物語』朝顔 本文は「新 日本古典文学大系」という文言は有名。和歌では「いざかくてをりあかしてん冬の月春の花にもおとらざりけり」(『拾遺和歌集』雑秋・一一四六・「高岳相如が家に、冬のよの月おもしろう侍りける夜、まかりて」・元輔) などとみえる。

⑤こゝろも籠て珍敷ー「こゝろも籠て」は、詠者主体の情趣が一首の中によく表れていることを意味する。「朝がすみかぜも音せぬあら玉の春はまづこそそのどけきをみ

れ」(宝治元年『院御歌合』早春霞・六番右・一二・信実)に對する為家の判詞に「右霞も心こもりてちからあるさまに待てるを、あら玉の春とつづけたることにすこしおぼつかなく侍る」とみえる。「常盤」、「冬」、「月」の組合せは「ふゆふかみむらむらみゆる」ときは木ののこるさびしきやまのはの月」(『如願法師集』「冬」・六三)の他にあまり例がみえず、判詞も表現の組み合わせが珍しいことを指摘したものが。

【通釈】

六番

左 持

兵衛督

枯れることなく生い茂っている木々によって辺りが見えない様子は変わらないけれど、月は冬にこそ一段と冴えていることだ。

右

左近衛権中将藤原朝臣為氏

(敷き妙の)衣の袖が寒いなあ。(この)冬の夜に雪が降りそうな気配で冷え冷えとしている、山の端の月よ。【判詞】「月は冬こそ」と言っている昔からある事も、「ときはなる」と言つては、本当に木の葉隠れ(の様子が際立ち、月の光と対象的で)、こころもこもっていて(表現としても)新鮮に見えますことでしょう。「雪けさえたる山の端の月」は、さほど悪いところもなく見えますので、かりに持とする。

〈七番〉

【本文】

七番

左 持

少将<sup>A</sup>

くるゝより夜もすから吹木枯<sup>①</sup>に涙<sup>②</sup>こほりて月をみるかな  
右 沙弥円空<sup>③</sup>  
をしなへてあまてる月の桂にも冬はさびしき影やそふらん

左、なみた氷で月をみるかな、まことに夜もすから吹木枯のさえて聞え侍るを、右、天照月の桂

にも冬はさびしきかけやそふらんと侍、まことに哥<sup>④</sup>からよろしく侍めれば、なを勝負いつれと申かたっこそ侍れ

【校異】

A 少将—ナシ(書)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』冬部中・冬月・五三九二・(同『河合社歌合』)・円空

おしなべてあまてる月のかつらにも冬はさびしき影やそふらん

【本歌】

〈右歌〉

『古今和歌集』秋歌上・一九四・「これさだのみこの家の歌合によめる」・忠岑

久方の月の桂も秋は猶もみぢすればやてりまさるらむ

【参考歌】

〈左歌〉

『新古今和歌集』冬歌・六〇四・「五十首歌たてまつりし時」・雅経

秋の色をはらひはててや久方の月のかつらに木がらしの風

【語釈】

①木枯——「のこしおく秋のかたみのからにしきたちはてつるはこがらしの風」(『新勅撰和歌集』冬歌・三六八・「題しらず」・宗家)の如く、しばしば秋から冬への季節の推移を表現する際に使われる。また、涙との関連では「こがらしにこの葉のおつるやまさとはなみだこそさへもろくなりけれ」(『山家集』雜・九三五・「題しらず」の如く、木枯らしが紅葉の葉などを吹き枯らし、その悲しみに涙するといった詠がみえる。

②涙こほりて——「雪の内に春はきにけりうぐひすのこほれる涙今やとくらむ」(『古今和歌集』春歌上・四・「二条のきさきのはるのはじめの御うた」)、「むかしおもふさよのねざめの床さえて涙もこほる袖のうへかな」(『新

古今和歌集』冬歌・六二九・「冬歌とてよみ侍りける」・守覚法親王)などの如く、寒さによって涙が凍りつくというような意味で詠まれる。比喩的な表現であるが、『古今和歌集』の頃から用いられており、漢詩でも「籠香銷盡火、巾淚滴成氷」(『白氏文集』卷十三・寒閨夜)の如く、涙を氷に見立てることがある。

③影やそふらん——月の光が射し添っているのだろうか、の意。「いつもみる月ぞとおもへどあきのよはいかなるかげをそふるなるらん」(『後拾遺和歌集』秋上・二五六・「寛和元年八月十日内裏歌合によみ侍ける」・長能)などが例。月の桂に光が射し添う、の意で詠まれた例には「ひかりそふ月のかつらにおく露やあきのなかばの山もそむらん」(『範宗集』秋・二二六・「月前露」)などがある。

④哥から——歌柄。歌全体の品格のことであるが、歌合判詞では、声調についていわれることもある。為家は「天川かはかせすずしとほづまのいつかと待ちし秋やきぬらん」(宝治元年『院御歌合』初秋風・四十九番左・九七・蓮性)について「左はうたがらことよろしく侍るにや、いつもきくめにみぬかぜ、負け侍るべし」また、「旅人のあさたつ野べの花薄たが白妙の袖とみゆらん」(建長三年『影供歌合』朝草花・四十七番右・九四・良教)について「あさたつ野べめづらしき所侍らねど、歌がら

よろしきよし各定申す」と判じている。

【通釈】

七番

左 持

少將

日が暮れてから、夜通し吹いている木枯らしで、涙が凍って月を見ていることだなあ。

右

沙弥円空

あまねく空に照り輝く月の桂の木にも、冬には寂しい光が射し添っているのだろうか。

〔判詞〕左（歌）は、「なみた氷て月をみるかな」（と詠んでおり）、実に夜通し吹いている木枯らしが冷え冷えとして聞こえますもの、右（歌）は、「天照月の桂にも冬はさひしきかけやそふらん」とございますのは、実に一首全体の品格がよろしくあるようですので、やはり勝ち負けはどちらとも申し上げがたくございます。

〈八番〉

【本文】

八番

左 持

弁

木枯<sup>A</sup>のふきもたゆまぬ夕ぐれに山の端さむくいつる月影

右<sup>B</sup>

散位藤原朝臣行家

冬河のそこ<sup>C</sup>まで月の影さえて下ゆく水もなを氷つゝ

左は、暮<sup>D</sup>に嵐さむく、右は、冬川に氷りさえたる<sup>E</sup>景気、姿詞<sup>F④</sup>、いつれもおとりまさると申かたし、猶為持

【校異】

A 木枯の―木枯<sup>の</sup>（内・家） B 右―ナシ（書）

C そこ―よそ（書・内・家） D 暮―暮山（書・内・

刈・河・家） E たる―たり（書）

F 姿詞―たゝことに（書・家）、たえことに（内）

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』冬部中・冬月・五三九三・（同『河合社歌合』）

春宮弁

木がらしの吹きもたゆまぬ夕ぐれに山のはさむく出づる

月かげ

〈右歌〉

『題林愚抄』冬部中・冬月・五三九四・（同『河合社歌合』）

行家

冬河の袖まで月のかげさえて下行く水も猶こほりつつ

【語釈】

①山の端さむく―「明けわたる雲まのほしの光まで山のはさむし嶺のしらゆき」（『御室五十首』冬・五八五・家隆）が早い例。ここでは「さをしかのなくゆふぐれの秋風に山のはさむくいつる月かげ」（『光経集』秋・二一四）な

どのように、月が山の端から寒しく出ている情景として解釈した。

②下ゆく水―「さゆるよの細谷川のうす氷した行く水のおともいつまで」『正治初度百首』一七六九・「冬」・生蓮)のように川の表面に張っている氷の下を流れる水と解釈した。

③景気―「いつしかとかものはがひにしもおきてたまものところに氷ぬにけり」『千五百番歌合』冬二・九百十三番左・一八二四・良平)に対し「左歌、冬の景気あらはれてきこえはべり」とある如く、一首から表される情景を指す。

④姿詞―歌全体からの情趣や表現をさす。「神山をあふぎてみれば白雲のたつは桜の梢なりけり」(治承二年)別雷社歌合』花・廿九番左・一一九・寂念)に対する俊成の判詞、「左歌、姿詞よろしくこそ侍るめれ」など。

【通釈】  
八番

左 持

弁

木枯らしの吹く勢いが弱まらない夕暮れに、山の端から寒々と出た月よ

右

散位藤原朝臣行家

冬河の底まで月の光が澄みきって、(川の表面だけではなく)下を流れている水までもさらに凍っていること

だ。

〔判詞〕左(歌)は、夕暮れ時の山に(吹く)嵐は冷たく、右(歌)は、冬の川に氷が冴えている情景で、歌全体からの情趣や表現は、どちらも劣つたりまさつたりしていると申し上げにくい、やはり持とする。

〔九番〕

【本文】

九番

左

甲斐

霜も雪の色もひとつにさゆれ共跡こそみえね庭の月かけ  
右 勝<sup>A</sup> 散位藤原朝臣為綱

③そのかみをおもひそ出る山あひの袖にもなれし冬のよの月  
霜雪の色も一にとをきて、あとこそみえねといへる、  
⑥心あるさまに侍るを、そのかみをおもひそ出ると  
侍る、おなし月の光も懐旧のころあはれにみえ侍  
れは、山あひの袖たちまさり侍へし

【校異】

A 勝―ナシ(書・刈・河) B そ―も(書)

C そ―て(書)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』冬部中・冬月・五三九五・「已上同(河合社

歌合)・安嘉院甲斐

霜雪の色もひとつにさゆれども跡こそみえね庭の月影  
(右歌)

『万代和歌集』神祇歌・一五九五・「河合社歌合に、冬月  
を」・藤原為綱朝臣

そのかみをおもひぞいづるやまあぬの袖にもなれし冬の  
よのつき

『歌枕名寄』一六四六・「河合 七瀬之内／万代」・為綱  
そのかみを思ひぞいづる河あひのなみにもなれし冬のよ  
の月

『夫木和歌抄』雑部十六・一六〇二九・「河合の神、山城  
／題不知」・為綱卿

その神をおもひぞ出づる河あひの神にもなれし冬の夜の月

【語釈】

①霜も雪の色もひとつに―「霜」と「雪」を同じ一首  
の内に詠み込んでいる歌は「おほとりの羽がひの山の  
霜のうへにかさねてみゆるけさの初雪」(『清輔集』冬・  
二〇一・「雪」)、  
「霜おきてなほたのみつるこやのあ  
しを雪」こそ今朝はかりはててけれ」(『式子内親王集』  
一六八・「冬」)などのように、景物が「霜」から「雪」  
に移り変わることで時間の経過を表しているものが主だ  
が、当該歌では「霜」と「雪」の色が同じであることに  
ついて言及しており、非常に珍しい表現となっている。

②跡こそみえね―「かきくらし猶ふるさとの雪の中にあ  
どこそ見えね春はきにけり」(『新古今和歌集』春歌上・四・

「五十首歌たてまつりし時」・宮内卿)のように形として  
は見えていないことを指す。当該歌では月の光がふりそ  
いでも目に見える形で残らないことを表現している。

③そのかみ―その当時、その折。当該歌では「衣での山  
ゐの水にかけみえし猶そのかみの春ぞこひしき」(『新古  
今和歌集』雑歌下・一七九七・「臨時祭の舞人にて、も  
ろともに侍りけるを、ともに四位してのち、祭日つかは  
しける」・実方)のように「上」と「神」を響かせている。  
なお、『明月記』によると藤原為綱は寛喜二年(一二三〇)

一月二二日の賀茂臨時祭で舞人を勤めており、右歌の  
「そのかみ」は為綱が賀茂の臨時祭で小忌衣を着て舞人  
を勤めた際のことを指しているとも考えられる。

④山あひの袖―山藍で染められた袖。大嘗会・五節・豊  
明節会などや神事で着する小忌衣は青摺りとも呼ばれ、  
山藍の樹液で摺り染めたものを用いた。「足曳の山あひ  
にすれる衣をば神につかふるしるしとぞみる」(『貫之集』  
三七一・「臨時の祭」)の詞書にあるように、臨時祭でも  
着用していた。

⑤なれ―「我が命し衰へぬれば白たへの袖のなれに  
し君をしそ思ふ」(『万葉集』巻第十二・正述心緒・  
二九五二)と同じく、「親しむ」の意と「衣服の糊けが

なくなり) よれよれになる、古びる」の意を掛ける。

⑥心あるさま—ここでは直接「冬」や「冬の月」という言葉を用いずにいながら「冬月」という題を深く理解し、冬の特徴を表す景物を詠みこむことによって、情趣豊かな「冬月」を表現していることを評している。

⑦懐旧—昔をなつかしみ、また慕いしのぶこと。自分の昔を思い出し懐かしむ場合と、直接知らない過去を懐古する場合がある。一例として、「つゆしげきよもぎがねやのひまとぢてふるき枕に秋かぜぞふく」(千五百番歌合)恋三・千三百五十番右・二六九九・寂蓮に顕昭が「右歌に、ふるき枕とよまれたるは長恨歌に、旧枕故衾誰与共といへる詞をひきて、源氏物語に懐旧のところにするしうでき侍るめり」と判詞をつけている。

⑧たちまさり侍へし—優れていますでしょう、の意。「たちまさる」の「たち」は「裁ち」を掛け、「袖」との詞遊びか。当該歌のように「たち」と「裁ち」をかけて判じている例では、「いとひてもかひなかりけり苔の袖そむる心のいつかあるべき」(正治二年『御室撰歌合』五十七番右・一一四・勝蓮)に対する俊成の判詞、「この袖そむる心のとつづけたるは、今すこしたちまさりて、歌めきたるにや」などがある。

【通釈】

九番

左

霜も雪の色も(月の光と) 同じように澄みきっているけれども、(跡がのこる霜雪とは違つて) 跡は見えない庭の月の光であるよ。

右 勝

散位藤原朝臣為綱

(舞人を勤めた)その昔を思い出すことだ。(小忌衣の)山藍の袖も(時間が経つて)古びてよれよれになるように、(同じく昔の賀茂臨時祭の頃から変わらず照らしている)慣れ親しんだ冬の夜の月であるよ。

〔判詞〕(左歌は)「霜(も)雪の色も一に」と置いて、「あとこそみえね」と言っているのは、(題の)心がよく表現できている様子に「ございますのを、(右歌は)「そのかみをおもひそ出る」とありますのは、(左歌と)同じ月の光でも昔を懐かしむ心情にしみじみとした情趣があるように見えますので、「山あひの袖」が勝っていますでしょう。

〔十番〕

【本文】

十番

左

能暹法師

みるまゝに光そさむき冬のよの月のかつらに嵐ふくらし

右 勝

中務大輔藤原朝臣為繼

一むらのたゝすの杜の木枯にあたりくまなき月のころ哉

左哥、あまりにやすくや聞え侍らん、右哥、

下句そすこしいひおほせぬさまに侍れと、上

句此哥合には捨かたく侍れば、可為勝

【校異】

A みる―見口(家) B や―ナシ(刈・河)

C そ―に(書・内・家) D は―はや(書・家)、は

や(内) E 可為勝―為勝(書・内・家)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①みるまゝに―見るにつれて。「みるまゝに冬はきにけり鴨のゐる入江の水ぎは薄ごほりつつ」(『新古今和歌集』冬歌・六三八・「百首歌中に」・式子内親王)のように、眺めている間に時間が経過したことを表す。

②光そさむき―「おほぞらのつきのひかりのさむければかげみしみづぞまづこほりける」(『和漢朗詠集』冬・三八六・「氷付春氷」)の如く、月の光が、見ているだけで寒々と感じられることをいう。

③あたりくまなき―「やはらぐるひかりやそふるすみよしのあたりくまなしありあけの月」(嘉応二年『住吉社歌合』社頭月・廿二番右・四四・憲経)のように、周囲に陰ったところがなく、あますところなく行き届いてい

ることをさす。

④やすく―「いそのかみふるののみゆきふみわけていまぞ昔の跡もみるべき」(宝治元年『院御歌合』野外雪・七十一番左・一四一・為経)に対する為家の判詞「ふるののみゆき、歌さまよろしくみえ侍るを、題のこころややすく聞え侍らむ」の如く、歌題を和歌の中に安易に詠み入れていることを難じている。

⑤いひおほせぬ―「今はただ涙なみえそ袖の月うつればかはるかげもうらめし」(建長三年『影供歌合』寄月恨恋・百九十七番左・忠定)に対する為家の判詞に「なみだなみえそいひおほせずとて持の由被定」とあるように、充分に詠み込んでいないことを表す。今回は特に、下の句だけでは歌題の「冬月」を詠んでいるとは言いい切れないことを指摘するか。

【通釈】

十番

左

能暹法師

見るにつれて(本当に)光が寒々しく感じられる。冬の夜の月の桂に嵐が吹いているに違いない。

右勝

中務大輔藤原朝臣為経

鬱蒼とした糺の森に吹いた木枯らしによって、(雲がなくなり月の光が)あたり一面に行き届いている月の頃であるなあ。

〔判詞〕左歌は、(歌題である「冬月」を)あまりに安易に詠み込んでいるように聞こえますでしょうか。右歌は、下の句で少し(歌題を)言い尽くしていない様ではあります。上の句(で、一むらの糺の森…と河合社を詠み込んでいるの)はこの歌合には捨てがたいものでございますので、勝ちとしよう。

——千鳥——

〔十一番〕

【本文】

十一番

千鳥

為家卿<sup>A</sup>

河<sup>②</sup>あひや身をうき浪に立千鳥<sup>④</sup>またはためしも鳴くそふる

左

行かへる賀茂の河原の友千鳥<sup>⑦</sup>しらしなした<sup>C</sup>にいのること

るを<sup>D</sup>

右

左哥、ためしなき身をうれへたるはかりにて、

ようあることゝはみえ侍らす、右、行帰るかももの

かはら、かくこそつゝくへく侍りけれ、しらしな下に

祈る心はと侍るも、そのゆへ<sup>⑩</sup>ふかく侍れば、尤以右可為勝

【校異】

A 卿―ナシ(書) B ーり(書・内・家)

C した―月(書) D を―は(書・内・刈・河・家)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①千鳥―海辺や河口に多く群れている小型の鳥。古くは

『万葉集』にも詠まれている。「たなばたはいまやわかるあまの川かは霧たちて千鳥鳴くなり」(『新古今和歌集』秋歌上・三二七・「中納言兼輔家屏風に・貫之」)、「思ひかねいもがりゆけば冬の夜の河風さむみちどりなくなり」(『拾遺和歌集』冬・二二四・「題しらず・貫之」)、「しほの山さしでのいそにすむ千鳥きみがみ世をばやちよとぞなく」(『古今和歌集』賀歌・三四五・「題しらず」)、「よみ人しらず」)、「跡みれば心なぐさのはまちどり今は声こそきかまほしけれ」(『後撰和歌集』恋二・六三五・「返ごとせざりける女のふみをからうじてえて」)、「よみ人しらず」)のように晩秋から冬にかけての歌、賀の歌、恋の歌などで詠まれるが、永長元年『権大納言家歌合』、『堀河百首』、長治二年『俊頼朝臣女子達歌合』などでは冬の題として挙げられるなど、しだいに四季のうちでも特に冬の歌で詠まれるものとして定着していったと考えられる。また、恋の歌として詠まれる場合は「浜千鳥」の形で詠まれることが多く、恋に泣く自分を千鳥になぞらえたり、恋の思いに夜を明かすとき、千鳥の鳴き声を泣きながら聞くという趣旨のものが詠まれた。

②河あひ―当該歌では河合社のある賀茂川と高野川との合流点を想定する。例えば、「川あひやきよき川原に麻の葉のぬさとりしてでいざみそぎせん」(『夫木和歌抄』夏部三・三八一九・「家集」・為家)がみえる。

③身をうき浪に——年へつる苦屋も荒れてうき波のかへるかたにや身をたぐへまし」『源氏物語』明石・二三八・明石の君)のように、「うき波」には「浮き」と「憂き」が掛けられている。当該歌合一番左においても為家は「よそなから」と疎外感を訴え、「月そかなしき」とわが身の不遇を嘆いているため、ここでも千鳥に仮託して自らの身を憂えていると考えられる。

④立千鳥——「なにはがたあさみつしほにたつちどりうらづたひするこゑきこゆなり」『後拾遺和歌集』冬・三八九・(永承四年内裏歌合にちどりをよみ侍ける)・相摸)のように波が来ると飛び立ち、波が引くと降り立つ千鳥を表す。

⑤ためしも鳴く——他に例を見ないくらい悲しさに、鳴きながら、の意。判詞に「ためしなき身を」とあることから、「鳴く」は「無く」と「鳴く」が掛けられた表現と思われる。「ためし」は先例、前例、慣例、慣習といった意味で用いられることが多いが、当該歌では「ためしなきかかるとわかれになほとまるおもかげばかり身にそふぞうき」『建礼門院右京大夫集』一二五・「さてもげにながらふる世のならひ、心うくあけぬくれぬとしつつ、さすがにうつし心もまじり、物をとかくおもひつづくるままに、かなしさもなほまさる心地す、はかなくあらはれなりける契のほども、我が身ひとつのことにはあら

ず、おなじゆかりのゆめみる人は、しるもしらぬもさずがおほくこそなれど、さしあたりためしなくのみおぼゆ、むかしも今もただのどかなるかぎりあるわかれこそあれ、かくうき事はいつかはありけるとのみおもふもさる事にて、ただとかく、さすがおもひなれにしことのみわすれがたさ、いかでいかで今はわすれむとのみおもへど、かなはぬかなしくて」などにみられるように、「類例」の意であり、自分の悲しみが他に例を見ないほどのものであることを表現するものであると考えられる。

⑥行かへる——「川ちどりなれもや物はうれはしきただすの杜を行帰りなく」『俊成五社百首』冬十五首・一六二・「千鳥」)にみえるように行つて帰る、往復するの意。

⑦賀茂の河原——賀茂川の河原。賀茂川は棧敷ヶ岳に発して京都の東部を貫流し、下鳥羽付近で桂川に合流する。「賀茂の河原」が詠まれる例は「ちかはれしかものかはらにこまとめてしばし水かへかげをだにみむ」『奥義抄』一九一・敦忠)など。

⑧友千鳥——千鳥が群れ集まるさまを表す。「友千鳥むれてなきさにわたるなりおきのしらすに塩やみつらん」『堀川百首』冬十五首・「千鳥」・九七九・国信)などが例。

⑨したにいのるこゝろ——「下にかくいのりのりのなら

ざらばわが身こもりのかみもたのまじ」(『惟規集』八・「をんなに」)のように表面には出さず心の中で祈る意と考えるのが妥当であろう。

⑩ようあることゝはみえ侍らす——「つれなきをうらみしよりもわりなきはたのむるくれをまつにぞ有りける」(『六百番歌合』恋部上・待恋・十四番左・六八七・季経)に対する「右申云、左歌還りてやうあるか、左不難申判云、右の人、還りてやうあるかといへる、いかに申すにか、まつ字あらはなるよしにや」などにみられる。当該歌では、自分の身の上を嘆いているばかりであつて、「必要のある事とは見えません」の意と思われる。

⑪ゆへふかく——「雪おもるみにならひてもおもふかな野なる草木のいかにさゆらん」(宝治元年『院御歌合』野外雪・六十七番左・一三三・実氏)に対する「左みにおもる雪にならひて野なる草木をおもへるころ、そのゆゑふかくみえ侍るにや」や「むかしおもふ袖の涙にくらぶれば時雨れざりける神無月かな」(建長八年『百首歌合』冬十五首・五百廿一番右・一〇四二・家長)に対する「右しぐれざりける神無月と侍る、ゆゑふかくきこゆれば為勝」などで確認できる判詞で、積極的に評価している例がみえるが、具体的に「ゆへ」が指すものは歌によつて異なる。当該歌では、「しらしなしたにいのることゝを」という表現にこめられた詠者の意図を、判者が汲

み取つていることを暗に示すための評か。

⑫尤以右可為勝——「ねざめするながづきの夜のとこさむみけさふく風に霜やおくらん」、「いかにせんきほふ木の葉のこがらしにたえずものおもふながづきのそら」(『千五百番歌合』秋四・七百六十九番・一五三六、一五三七・公継、定家)に対する定家の判詞、「左、涼夜之方永、耿介而不寝ころ、むかしの華省の秋思ひやられていとをかくこそ侍るめれ 右は、いかにせんとおけるより風情つきにけるにやときこえ侍れば、尤以左可為勝」のように、当然右を勝ちとすべき、の意。

【通釈】

十一番 千鳥

左

為家

波間から自分の身の上をつらいと思つて飛び立つ千鳥は、(自分のように)二度と他に例を見ないくらい悲しさに、鳴きながら日々を送っていることよ。

右 勝

蓮性

行き帰る賀茂の河原に群れている千鳥は、私が(表面には現れていないが、その)下に祈っている心は知らないのであるな。

〔判詞〕左歌は、他に例を見ない身の上を憂えているばかりであつて、必要のある事とは見えません、右(歌)は、

「行帰るかものかはら」は、このようにこそ続くのがよいのですねえ、「しらしな下に祈る心は」ごありますのも、そのゆえが深くございますので、当然右を勝ちとするべきだ。

〔十二番〕

〔本文〕

十二番

左 持

信実

霜さゆるつゝみのうへの河むかひ遠かたきけは千鳥鳴なり

右

真観

神さふるたゝすの杜の夕千鳥河瀬をかけて鳴わたる也

つゝみのうへ、たゝすの杜、川むかひ、夕千鳥、を

ちかた

きけは、河せをAかしくみえ侍れば、よろしき持と

申へくや

〔校異〕

A 々かしくみえーかけて見え（書・内・家）、かけて

をかしくみえ（刈・河）

〔他書所伝〕

〔左歌〕

『信実集』冬歌・一〇六・「家にすすめ侍りし河合のやしろの歌合に、千鳥」

霜さゆるつゝみのうへのかはむかひをち方きけば千鳥啼くなり

『現存和歌六帖』八三五・「（ちどり）」・信実朝臣

しもさゆるつゝみのうへのかはむかひをちかたきけばちどりなくなり

『題林愚抄』冬部中・千鳥・五四六九・同（河合社歌合）・

信実朝臣

霜さゆるつゝみのうへの河むすび遠かた聞けば千鳥鳴くなり

〔右歌〕ナシ

〔語釈〕

①霜さゆるつゝみのうへの河むかひ―「河むかひ」は

「竹おひて舟さしよする川むかひ霧のみ秋の明ぼのの色」

『拾遺愚草員外』三二八・「建久七年秋ころ、いたはる

こと侍りてこもりゐたる夕つがた、大将殿よりこの歌を

かみにおきてただいまと侍りしかば、使につけてまゐらせし、いまみれば歌にてもなかりけり」(二)のように対岸

のことで、ここでは霜が冷え冷えと凍っている堤の上に

対岸（の様子）が覗き見えている情景。霜と堤の組み合わせ

わせは当該歌が早い例であり、当該歌合以後では「しも

がれのよこののつゝみかぜさえていりしほとほくちどり

なくなり」『続古今和歌集』冬歌・六〇八・「堤千鳥を」・

光俊）がある。

②遠かたきけは―遠方に（耳を澄ませて）聞くと、の意。

ここでの遠方は「川むかひ」、つまり対岸（の遠方）。用例では「をちかたにきこえしもせじあじろ人ふねよぶこゑはなみにまがひて」（『行宗集』二四五・網代）がある。

③神さふる―「ときかけつころものたまはずみのえの神さびにけるまつこのずゑに」（『後拾遺和歌集』雑・一〇六八・くまのにまゐりはべりけるに住吉にて経供養すとてよみはべりける・増基）などにみられ、神々しく厳かになつていく様子をさす。

④夕千鳥―夕方の千鳥、夕方に飛び立つ千鳥。「月さゆるいはまをあさる夕千鳥こころすみてやなれもしばなく」（『公衡百首』四五・（冬））が早い例。

⑤河瀬をかけて―河瀬一面に渡つて、の意。「千鳥と「かける」が共に詠まれる場合、「おきつ波やそしまかけすむ千どり心ひとつといかがたのまむ」（『金槐和歌集』雑部・六〇七・素暹法師物へまかり侍りけるにつかはしける）や、「かぜさゆるやそのみなとのあくるよにいそざきかけてちどりなくなり」（『万代和歌集』冬歌・一四二一・「前撰政の右大臣の時の百首に、湊千鳥を」・信実）など、多く「駆ける」のではなく「架ける」の意味で詠まれている。

⑥河せをくかしくみえ侍れは―他本に拠り、「河せをかてをかしくみえ侍れは」に改める。「をかしく」は、「つゝ

みのうへ」、「川むかひ」、「夕千鳥」、「をちかたきけは」

「河せをかけて」の語がどれも用例が少なく、斬新な表現であること、「たゝすの杜」が河合社にちなんだ詞であることを踏まえ、それらが組み合わさっていること、面白さを評価するか。またこの判詞では、「これやこのころあるひとながむべきなにはわたりのはるのあけぼの」、「あはれさはふりゆくままにそへてけりたか津の宮の春のあけぼの」（『六百番歌合』春部・春曙・廿七番・一一三、一一四・兼宗、家房）に対して俊成が両方のあけぼの、なにはわたり、たかつの宮、共に優の所どもなり、勝負難決、可為持歎」と判じたように、両歌よりそれぞれ和歌の構成上で対応する部分を引用して判じており、両歌の表現の照応に着目して判じたことがうかがえる。

【通釈】

十二番

左 持

信実

霜が冷え冷えと凍っている堤の上に覗き見える川の向こう岸、そして遠くの方に（耳を澄ませて）聞くと、千鳥が鳴いているのが聞こえる。

右

真観

神々しい糺の森にいる夕方の千鳥が、河瀬一面に渡つて鳴き続けているのが聞こえる。

〔判詞〕「つゝみのうへ」、「たゝすの杜」、「川むかひ」、「夕千鳥」、「をちかたきけは」、「河せをかけて」（の詞が左歌、右歌それぞれ）趣深く（おもしろく）感じられますので、（難のない）良い持と申し上げるべきでしょうか。

〔十三番〕

【本文】

十三番

左 持

光成

吹まよふ河かせさゆる冬のよのあかつきふかく千鳥鳴なり

右

少将弟

声たてゝ霜夜をさむみ鳴千鳥かけみたらしや先氷るらむ

右、かけみたらしやと侍、あな<sup>④</sup>か<sup>③</sup>ち<sup>②</sup>に<sup>A</sup>よ<sup>B</sup>う<sup>C</sup>なく侍

にや、左、またさせる事なく侍れは、勝負なく

て侍れかし

【校異】

A ようよく（刈・河） B 侍に侍り（書）

C てーナシ（書・内・家）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①吹まよふ―「吹きまよふ野風をさむみ秋はぎのうつりも行くか人の心の」（『古今和歌集』恋歌五・七八一・題

しらず・常康親王）などのように、風が方向を定めずに激しく吹く意。

②あかつきふかく―夜明けからまだ間のある時間帯のことを言う。「蟬のはよるのあらしやさむからん晝ふかく衣うつなり」（承久元年『内裏百番歌合』聞擣衣・六十一番右・一一六・兵衛内侍）は早い例。

③みたらし―「御手洗川」のこと。ここでは、「いはでのみたのみぞわたるよそながらみたらし川の音にたてねど」（治承二年『別雷社歌合』述懐・二番右・一二四・讃岐）などにみられるように、「御」と「見」をかける。

④あなかちによくなく侍にや―強引で必要ないではありませんか、の意。少将弟が河合社を言祝ぎたいがために「みたらし」の語を使ったと判者が察してこのように判じたものと解した。あるいは「年をへてうきかげをのみみたらしのかはるよもなき身をいかにせん」（『新古今和歌集』神祇歌・八八八・賀茂にまゐりて・周防内侍）などのように、人影を映すことの多い御手洗川に千鳥の影を映したことを難じている可能性もあるか。

【通釈】

十三番

左 持

光成

激しく吹き乱れる川風が冷え冷えとして冬夜の、暁までまだ長い時に千鳥が鳴いているのが聞こえる。

右

少将弟

声を張り上げて霜夜が寒いので鳴いている千鳥（であるなあ）、（その）影を映す御手洗川は真つ先に氷つているだろう。

〔判詞〕右（歌）は、「かけみたらしや」とありますのは、強引で必要ありませんでしょうか。左（歌）は、又それほどどの事がありませんで、勝ち負けがないでしょうよ。

〔十四番〕

〔本文〕

十四番

A<sup>①</sup>左 持

為教

冬きては風やさむけき川千鳥なかき霜夜に今そ鳴なる

右

左京大夫

冬河のみきはの氷さむからし友よふ千鳥わひつゝそなく

両首無得失、一決不分明

〔校異〕

A 冬きては―冬は来て（刈・河）

〔他書所伝〕

〔左歌〕

『現存和歌六帖』八三七・「(ちどり)」・藤原為教朝臣

ふゆきてはかぜやさむけきかはちどりながきしも夜にいまぞなくなる

〔右歌〕ナシ

【語釈】

①冬きては―校異Aは、同一系統である刈谷・河野以外の諸本が「冬きては」となっている点、また「冬は来て」に比べ、「冬きては」こよひぞはつ夜いつのまにかたしく袖の寒えわたるらん」『堀河百首』冬十五首・八九三・「初冬」・隆源）や「冬きてはふかからねどもおきてみるあしたのはらは霜がれにける」『式子内親王集』一六〇・「(冬)」など、「冬来ては」の用例が多い点から底本に従う。

②さむけき―「吹く風の音たかくのみきこゆればおくつゆぞたださむけかりける」『千里集』四八・「涼風露転寒」のように、いかにも寒く感じられるさまである、の意。

③川千鳥―川辺りにいる千鳥。「河千鳥なくやさはべのおほる草すそうちおほひ一夜ねにけり」『清輔集』冬・二四九・「恋」など。

④さむからし―「寒くあるらし」の略。寒いに違いない、の意。「らし」は事実に基づいて推量する助動詞であり、ここでは「秋の夜はつゆこそことにさむからし草むらごとむしのわぶれば」『古今和歌集』秋歌上・一九九・「(題しらず)」・よみ人しらず)のように、下句「友よふ千鳥わひつゝそなく」をその根拠として述べるか。

⑤友よふ千鳥―「さ夜中に友呼ぶ千鳥物思ふとわび

居る時に鳴きつつもとな」(『万葉集』巻第四・相聞・六一八・「大神女郎、大伴宿祢家持に贈る歌一首」・大神女郎)のように友を鳴いて呼んでいる千鳥。

⑥わひつゝそなく—ここでは第四句「友よふ千鳥」をより活かすため、千鳥は一方で寒さを「わび」つつ、一方で友を恋しがって「な」いている、と解釈する。

⑦無得失—優れている点も劣っている点もないこと。「冬きぬとしるしばかりをみせがほにこほればとくる山河の水」、「水鳥の上毛の霜をうちらふ羽かぜややがてさえまさるらん」(正治二年『御室撰歌合』冬・四十四番・八七、八八・隆信、有家)に対する俊成の判詞、「左右共無得失可為持之旨被申、いかが侍るべかりつらむとこそ見給ふれ」や、「徒にはつ音ほどふる時鳥まつとせしまにさ月きにけり」、「子規忍びしほどの一こゑをいまはさつきとなきやふるさむ」(宝治元年『院御歌合』五月郭公・卅五番・六九、七〇・師継、雅忠)に対する為家の判詞、「左右ともに心詞させる無得失侍れば、為持」などが例。

⑧一決不分明—勝負が決し難いことを言う。俊成が「二葉よりのみぞわたる諸かつらつたはりきたる跡はたがはじ」、「ふかからぬ汀にあとをかきとめて御手洗河をたのむばかりぞ」(治承二年『別雷社歌合』述懐・廿一番・一六一、一六二・公時、定家)の二首に、「左もるかづら、

二葉よりとおき、つたはりきたるなどいへる心姿をかしくこそ侍るめれ、右、御手洗川をたのむゆゑにふかからぬことのはをかきとむらん、思ふ心なきにあらず、老の心なん乱れて勝負不分明、よりて猶持と申すべし」と判じたように、「不分明」も「無得失」と同じく、勝負のつかない持の場合に用いられる。

【通釈】

十四番

左 持

為教

冬が来たので風が寒々としているのだろうか。河千鳥が長い霜夜に今こそ鳴くのが聞こえる。

右

左京大夫

冬河の汀の水は寒いに違いない。(凍った汀で)友を呼ぶ千鳥が(寒さを)つらいと思いつながら(友を呼んで)鳴いている(のだから)。

〔判詞〕両首共に優れている点も良くない点もなく、(勝負をどちらか)一つに決めることは(できず、勝敗は)はっきりとしない。

〈十五番〉

【本文】

十五番

左 持

宿禰成茂<sup>A</sup>

たかためのあふせを夜半に尋らむ川浪千鳥立居鳴なり

右

永光

我またぬ年ふる浪になく千鳥更ぬる声そ身にしられる

左、下句ちからあるさまに侍を、末句すこしお

ほつかなきやうにや侍らん、右、ふけぬるこそそ

身にしられるといへる、さしあひたるやうに侍

うへに、としふる浪と侍もみくにたち侍れば、

なすらへて可為侍

【校異】

A 宿祢―ナシ(書・内・家) B 我―われ(刈・河)

C 年ふる―としまか(書・内・刈・河・家)

D ける―けり(刈・河) E 下―上(書・内・家)

F さしあひたるやうに侍うへに―さしあひたるやうに

侍るうへ(書・内)、ナシ(家) G としふる―としまか(書・

内・刈・河・家) H 侍―鳴(刈・河) I み―□(家)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【参考歌】

〔左歌〕

『拾遺和歌集』冬・二二四・「題しらず」・貫之

思ひかねいもがりゆけば冬の夜の河風さむみちどりなく

なり

『拾遺和歌集』雑上・四八四・「はつせへまで侍りけるみ

ちに、さほ山のわたりにやどりて侍りけるに、千鳥のな  
くをききて」・能宣

暁のねぎめの千鳥たがためかさほのかはらにをちかへり  
なく

【語釈】

①あふせを夜半に尋らむ―「さよふかくあふせたづぬる  
ひこぼしはそのむつごとのほどもあらじな」〔在良集〕  
九・「七夕」)、「ふちとのみ涙のかはは成りにしをいかで  
あふせに尋ねきぬらん」〔月詣和歌集〕恋下・五五三・  
「初遇恋の心をよめる」・覚盛)にみられるように、恋  
しい相手を夜中に訪ねていき、会うこと。「千鳥」と「あ  
ふせ」がともに詠まれている例は珍しいが、「千鳥」が  
何かを「尋」ねる例は、「さ夜千鳥はるかにかよふ声す  
なり浦よりをちに友や尋ぬる」〔御室五十首〕詠五十首  
和歌・八三八・「冬七首」・寂蓮)、「うれしくぞ尋ねとふ  
なる友千鳥おいのね覚のあり明の空」〔正治初度百首〕  
一一六九・「冬」・俊成)などがみえる。

②川浪千鳥―「川浪千鳥」という表現は先行例がなく、「川  
浪」と「千鳥」を詠み込んだ例もみられない。しかし、「近  
江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古思ほゆ」〔万葉  
集〕巻第三・雑歌・二六六・「柿本朝臣人麻呂の歌一首」・  
人麻呂)の「夕浪千鳥」と作りが似ていることから、「河  
の波に遊ぶ千鳥」をさすと考えられる。「川」と「千鳥」

を詠みこんだ歌として有名な「思ひかねいもがりゆけば冬の夜の河風さむみちどりなくなり」(『拾遺和歌集』冬・二二四・「題しらず」・貫之)は「あふせ」ではないが、同じく恋しい相手を夜中に訪ねていく様子が「いもがりゆけば」という表現で詠まれており、これをふまえて詠まれた「いもがりとさほの川べをわがゆけばさよかふける千鳥なくなり」(『千載和歌集』冬歌・四二四・「傳大納言道綱家歌合に、千鳥をよめる」・長能)のように、着想の根底に貫之詠があるか。

③立居——しがの浦の松吹く風のさびしきに夕浪千鳥たちみなくなり」(『堀河百首』冬十五首・九七七・「千鳥」・公実)などにみられ、波が寄せれば飛び立ち、引けばまた浜に下りたつこと。なお、「立」は「波」の縁語。

④我またぬ——わがまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず」(『古今和歌集』冬歌・三三八・「物へまかりける人をまちてしはすのつこもりによめる」・躬恒)、「我またぬとしさへせて暮れぬれば涙もいとどふりそほちつつ」(『後鳥羽院御集』八九八・「冬五十首」)のように、「年」という言葉に続き、自分は待ち望んでいない年という意で用いられることが多い。当該歌では「自分には希望をもてる年がない」ということを表現したもののか。

⑤年ふる——他本に抛り「としまか」に改める。「敏馬」

は撰津国の歌枕であり、現在の神戸市灘区付近とされる。「あらし吹くとしまがさきのいりしほにともなし千鳥月になくなり」(『正治初度百首』三七一・「冬」・守覚法親王)、「あらしふくとしまがいそやさむからんなごのいりにきゆるあぢむら」(『林葉和歌集』冬歌・六五一・「師教君家にて、水鳥」)のように、「としまがさき」や「としまが磯」のような形でみられる。当該歌では、「我またぬ」が「としまか波」という言葉に続いており、底本で「年ふる」、「としふる」の表記がみられたことも加味すると、「としま」と「齡」が掛けられていると考えられる。

⑥更ぬる声そ身にしられける——「更ぬる声」という先行例はみえないが、「玉つしま空に千鳥の声ふけて浪にかたぶく冬のよの月」(『壬二集』殷富門院大輔百首・二四七・「冬十首」)、「さよ千鳥ふけゆくこゑをきくなへにをりしもかくる袖のうらなみ」(『拾玉集』三九二〇・「深夜千鳥」)、「すまのうらの夕浪千鳥声ふけてせきやしぐるる比ぞかなしき」(『拾玉集』詠三十首和歌・四六三七・「深夜千鳥」)のように、夜が更けて聞こえる鳴き声をいう。当該歌では敏馬の千鳥の鳴き声を耳にした視点人物が我が身の「老け」に思いを至す仕立てとなっている。例えば、「かずかすにおもひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる」(『古今和歌集』恋

歌四・七〇五・「藤原敏行朝臣のなりひらの朝臣の家なりける女をあひしりてふみつかはせりけることばに、いままうでく、あめのふりけるをなむ見わづらひ侍るといへりけるをききて、かの女にかはりてよめりける」・(業平)では、業平が雨によつて我が身のわびしさに思い至る。

⑦左、下句ちからあるさまに侍を、末句すこしおほつかなきやうにや侍らん―他本に拠り「上句」に改める。左歌の上の句、「たかためのおふせを夜半に尋らむ」を「ちからあるさま」と評し、下の句の「川浪千鳥立居鳴なり」を「すこしおほつかなきやう」と評している。「年ふれとあふみの海は名のみしてみるめよせこぬ志賀の浦浪」〔河合社歌合〕不遇恋・廿三番左・光成) に対する為家の判詞「左は、詞つよくてちからあるさまに侍るにや」は左歌に用いられている言葉が「つよくて」、「ちからあるさま」であると評しており、ここでの「ちからあるさま」は用いられている言葉が力強く感じられることを意味すると思われる。また「朝がすみかぜも音せぬあら玉の春はまづこそこのどけきをみれ」(宝治元年『院御歌合』早春霞・六番右・一二・信実) に対する為家の判詞には「右霞も心こもりてちからあるさまに侍るを、あら玉の春とつづけたることにすこしおほつかなく侍る、あら玉の夏冬なども申し侍るべきにや」と、「朝がすみかぜも音せぬ」までは「心こもりて」、「ちからあるさま」、つまり詠者

の思いがあらわれていて力強く感じられるが、「あら玉の春」と続けることは「すこしおほつかな」とし、「ちからある」と「おほつかなき」が対照的な意味の評価として書かれていることから、当該歌における意味は、上の句は詠者の思いが表現できていて力強いように感じられるが、下の句は詠者の思いを表現しきれておらず、少々ぼんやりとしたように感じられるのではないか、ということか。

⑧さしあひたるやう―「教ならで庵もるしづも月や見るあふたのみある秋の契りに」(建長三年『影供歌合』田家月・百三十八番右・二七六・小宰相) に対する為家の判詞「秋のちぎりの歌、るの字あまたさしあひてきまにくしとて負け侍りき」や、「時鳥夕かたまけてあまばれの雲にたぐひて鳴きわたるなり」(建長八年『百首歌合』夏・四百七十五番左・九四九・顕朝) に対する蓮性の判詞「左ことなる難にては侍らねど、夕かたまけて雲にたぐひてと侍るや、すこしさしあひて侍らむ」のように、同じ字、似た言葉などが何度も用いられることなどにより、歌の響きが損なわれることを難したものの。当該歌では「更ぬる声そ」と「身にしらられる」ということばが響きの上でうまくつながらないことをさすか。

⑨みゝにたち―詞や続き具合が耳障りなことをいい、歌の調べが滞っている際や、用語があまりにも古めかしい

もの、歌語らしくない生硬なものが用いられている場合などに使われる。「鳴きてくるかたもきこゆる雁金の数こそみえね峰の秋霧」、「玉づさはかけてもみえじ秋霧のはれぬ雲井に雁はきにけり」（建長三年『影供歌合』霧間雁・九十番・一七九、一八〇・実雄、少将内侍）に対する為家の判詞「かたもきこゆる秋霧はみみにたつやうに侍れば、かけてもみえぬたまづさ心にくしとて為勝」などにみられる。当該歌の場合、「としま」を地名の「としま」と「齡」の掛詞にすることにより強引な表現となつてしまい、ことばがなだらかでなくなったことを難じたものか。

⑩なすらへて―持の際によく見られる表現で、「あまつ空たつ朝霧のたえだえにはれゆくみれば雁はきにけり」、「秋霧のやへにかさなる山のはを声もへだてず雁はきにけり」（建長三年『影供歌合』霧間雁・九十三番・一八五、一八六・有教、教定）に対する判詞「晴行くみれば間もすきて見え侍るにや、八重にかさなる歌がらよろしとて、なすらへて持と定めらる」のように、肩を並べるものとみなす、の意。

【通釈】

十五番

左 持

誰のために逢おうと（わざわざ）夜中にたずね

成茂

ているのだからか、河の波に遊ぶく千鳥が、河瀬に波が寄せれば飛び立ち、引けばまた浜に下り立ち鳴いているようだ。

右

永光

私が待ち望んでもいないのに年を重ねたように、敏馬の波に鳴く千鳥の、夜が更けてしまつて鳴く声が、希望のもてない年を重ねてしまつた）わが身に思い知られることだ。

〔判詞〕左（歌）は、上の句は（詠者の思いが表現できている）力強いようすが、末の句は（詠者の思いを表現しきれておらず）少々ぼんやりとしているように感じられるのではないのでしょうか。右（歌）は、「ふけぬることそ身にしられける」というのは、（響きが損なわれ）差し障りがあるようすが、（響きがしまか浪」とありますのも（無理のある表現になつたためにことばがなだらかでなく）耳障りな感じがしますの、同等のものとして持とする。

〈十六番〉

【本文】

十六番

左 勝

兵衛督

をきまよふ霜夜の千鳥をちかへり鳴ねもさむきか①も川の水②

①②加茂の川風

右

為氏

くれゆけは夕浪千鳥声たてゝ河かせさむみ今そなくなる  
 左右の千鳥ぞ、させるとかなく侍れと、お  
 なし河瀬も社頭あらはれて侍らむは勝侍へし

【校異】

A 加茂の川風イ かも川の水―かも川の水（書・内・家）、加茂の川風イ かも川の川

水（刈）、かも風イの川水（河） B そーナシ（書・内・家）

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ

〔右歌〕

『題林愚抄』冬部中・千鳥・五四六八・「河合社歌合」・

為氏

くれ行けば夕浪千鳥声たてて河風さむみ今ぞなくなる

【語釈】

①をきまよふ―露や霜の量が夥しく置き場所に迷う、の意。「住よしのちぎのかたそぎゆきもあはで霜置きまよふ冬はきにけり」〔堀河百首〕冬十五首・九二〇・「霜」・俊頼）などがある。

②をちかへり―「をちかえる」とは、元へ戻る、繰り返すの意。「をちかへりぬるともきなけ郭公いまいくかかはさみだれのそら」〔千載和歌集〕夏歌・一八九・「雨中郭公といへる心をよみ侍りける」・資賢）などにみられる。

③加茂の川風イ かも川の水―当該歌合十七番の判詞で「先の番に、すでに賀茂の川風まさるへしとさためつれば、是もさこそ侍らめ」とあることから今回は異本注記により「加茂の川風」と改める。

④夕浪千鳥―夕べの波の間を鳴いて飛ぶ千鳥、夕波に遊ぶ千鳥、のこと。「近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古思ほゆ」〔万葉集〕卷第三・雑歌・二六六・「柿本朝臣人麻呂の歌一首」・人麻呂）が早い例。

⑤河かせさむみ―「冬の夜の川風さむみ氷しておもひかねたる友千鳥かな」〔正治後度百首〕冬・五〇・「氷」・後鳥羽院）などのように、川を吹き渡る風が寒々しいことをいう。

⑥おなし河瀬も社頭あらはれて侍らむは勝侍へし―両首ともに河瀬の様子を詠じているが、左歌は「加茂」あたりに河合社の様子が表れていることを為家が尊重したものの。

【通釈】

十六番

左勝

兵衛督

置き場所に困るほど霜の降りる夜に千鳥が繰り返し鳴く声も、寒々しい賀茂の川風だなあ。

右

為氏

（日が）暮れていくと夕波で遊ぶ千鳥が声を張り上げ、

川風が寒いので（寒々しい風をうけた）今こそ鳴くのが聞こえる。

〔判詞〕左右の千鳥は、特別な欠点があるわけではないけれど、同じ川瀬でも社頭が表れていますでしょう（左歌の）方が勝ちでしょう。

〈十七番〉

【本文】

十七番

左 勝

少将

冬<sup>①</sup>されは加茂の河風吹過<sup>②</sup>て霜夜の千鳥はるかにそなく

右

円空

夜をさむみはかひの霜やかさぬらんはらひもあへず千鳥

鳴也

左は、景気幽<sup>⑥</sup>にてよる敷聞え侍り、右は、心こと

葉<sup>④</sup>こまかにてすてかたく侍れとも、先の番

に、すてに賀茂の川風まさるへしとさためつれば、

是もさこそ侍らめ

【校異】

A こまかーこまやか（書・内・家）

B さこそーさそ（刈）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』冬部中・千鳥・五四七〇・同（河合社歌合）・

円空

よをさむみはがひの霜やかさぬらんあらひもあへぬ千鳥  
鳴くなり

【参考歌】

〈右歌〉

『後撰和歌集』冬・四七八・「題しらず」・よみ人も

夜をさむみねざめてきけばをしぞなく払ひもあへず霜や  
おくらん

【語釈】

①冬されは―冬が来たので。「去る」は「夕されば」、「春されば」などと同様に、その時や季節になるという意。

先行例では、「ふゆされば嵐のこゑもたかさこの松につけてぞきくべかりける」（『拾遺和歌集』冬・二二六・

「恒徳公家の屏風に」・能宣）、「冬されば野原もいとど霜がれて物さびしくも成りまさるかな」（『長秋詠藻』冬・一五七・「初冬」）などがある。

②加茂の河風―賀茂川の面を吹き渡る風。賀茂川から吹

いてくる風。神社題で詠まれた先行例には、「わがいのる心のすゑをしれとてやたもとにとほるかものかはかぜ」（『秋篠月清集』二夜百首・一八三・「神社五首」）

などがある。

③吹過て―風が吹いて通り過ぎて。「女郎花ふきすぎてくる秋風はめには見えねどかこそしるけれ」〔古今和歌集〕秋歌上・二三四・「朱雀院のをみなへしあはせによみてたてまつりける」・躬恒、「ふきすぐる風さへことに身にぞしむ山田の庵のあきの夕ぐれ」〔山家集〕秋・四六五・「田家秋夕」）などがある。

④はかひ―羽交い。鳥の左右の翼の先が重なり合うところの意だが、単に鳥の翼を指すこともある。早い例では「葦辺行く鴨の羽がひに霜降りて寒き夕は大和し思ほゆ」

〔万葉集〕巻第一・雑歌・六四・「慶雲三年丙午、難波宮に幸す時に志貴皇子の作らず歌」・志貴皇子）がみえる。

⑤はらひもあへす―払いきれずに。霜が鳥の翼に積もり、それを払いきれない状態を表す。当該歌は、初句「夜をさむみ」、第四句「はらひもあへす」が参考歌と共通である他、「霜やおくらん」と「霜やかさぬらん」、「をしぞなく」と「千鳥鳴也」など、全体的に参考歌と似たような表現を用いている。しかし、当該歌は、参考歌の「おく」に該当する部分を「重ぬ」としたり、また、参考歌では「をしぞなく」が上の句、「霜やおくらん」が下の句であるのに対し、当該歌では、「霜やかさぬらん」を上の句、「千鳥鳴也」を下の句に配置するなどしており、細部の表現や構成を変えている。夜になっていっそう寒さが増したので、千鳥の翼に降りた霜にさらに霜が積も

り重なっているさまを、聞えてきた千鳥の鳴き声から想像する詠となっている。なお、参考歌は『古今和歌六帖』『拾遺和歌集』『金玉和歌集』『和漢朗詠集』にも撰入した歌である。

⑥幽―深遠な様子を表す。和訓「かすかに」。定家は、「よやふくるくものはるかになくかりもひとつになりぬ衣うつこゑ」〔千五百番歌合〕秋四・七百七十一番右・家隆）に対して「右、霜砧之韻夜深、雲雁之声暗通、景気甚幽而感情相催歎」と判じている。

⑦こまか―綿密に配慮が行き届いている様子を表す。例えば、「枝かはす神ちの山の松のはに君が千年のかけぞみえける」（宝治元年『院御歌合』社頭祝・百卅番左・二五九・越前）に対して為家は「左歌千よのかずこまかにみえて難なく待るめり」と判じている。ここでは、参考歌の表現を踏まえつつも、詞や構成を微妙に変化させ、参考歌よりもいっそう霜が降り積もった、千鳥詠の歌として詠んでいる点を評価する。

【通釈】

十七番

左勝

少将

冬が来たので、賀茂の川風が吹き通り過ぎて、霜夜のに千鳥が遙か遠くで鳴いている。

右

円空

夜が寒いので、翼に置いた霜が積もり重なっているの  
であろうか。(霜を) 払いきれずに千鳥が鳴くのが聞こ  
える。

〔判詞〕左(歌)は、情景が深遠でありよろしく聞こえ  
ます。右(歌)は、心も詞もすみずみまで綿密に配慮が  
行き届いていて捨てがたくございませぬもの、先の番に  
おいて、既に「賀茂の川風」が勝るでしょうと定めまし  
たので、これもそうでございませぬ。

〔十八番〕

【本文】

十八番

左

弁

河風に千鳥鳴なりむは玉のよるの氷りのうへやかなしき

右 勝<sup>A</sup>

行家

興<sup>②</sup>つ風あら磯浪のいやましにたつことやすき小夜千鳥哉

よるの氷りのうへやとさ<sup>⑤</sup>ゝれたるそ、いか<sup>⑥</sup>とみえ

侍る、た<sup>⑦</sup>つことやすき、つねのことも、あら磯浪千鳥

う<sup>B</sup>ては珍敷聞え侍れば、河風よりはおきつかせ

つよくや侍へき

【校異】

A 勝ーナシ(家)

B うてーうて(本)

うて(書)、にて(刈・河)

C 珍敷ーめつらしき(内・家)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』冬部中・千鳥・「同(河合社歌合)」・  
五四七一・行家

おきつ風あらいそ波のいやましにたつことやすきさよ千  
鳥かな

【語釈】

①むは玉のー枕詞。「黒」や「夜」、その複合語や関連語  
に掛かる。例に「うばたまの夜のふけ行けばひさぎおふ  
るきよき河原に千鳥鳴くなり」(『新古今和歌集』冬歌・  
六四一・「題しらず」・赤人)や「むばたまのよるの衣を  
たちながらかへるものとはいまぞしりぬる」(『新古今和  
歌集』恋歌三・一一七五・「題しらず」・実頼)などが  
ある。

②興つ風ー沖つ風。沖を吹く、沖から吹く風。千鳥と  
の組み合わせは、「おきつかせふきあげのうらやさむか  
らんなみたちさわぎ千鳥なくなり」(『六条修理大夫集』  
一一・「殿上にて、千鳥といふ題をよませたまうしに」  
などがみえる。

③あら磯浪ー荒磯に寄せる激しい波。「みさごゐるあら  
いそなみぞさわぐらししほやくけぶりなびくかたみゆ」  
『重之集』三三四・「(うらみ十)」などが例。

④小夜千鳥―夜中に鳴く千鳥。早い用例には「さ夜ちどり  
りはねうつなみのおとすなりよはのはるかぜこほりとく  
らし」(『賀茂保憲女集』六・「正月のころほひ、おもひ  
あまりては、ながうたもあるべし」)がみえる。

⑤さくれ―直接言及なさって、の意。先行例は「いつ  
かわがすがたのいけとおもふにもかれはのあしのあは  
れなるかな」(『千五百番歌合』冬・「九百四十六番右・  
一八九一・兼宗」)に対する季経の判詞、「右歌、寒蘆を  
見て老後をなげく、さもありぬべきことに待れども、わ  
がすがたなどさされたるぞあまりに侍る」など。

⑥いかくとみえ侍る―当該歌においての「よるの氷りの  
うへや」という表現への疑問を表す。下の句で「よるの  
氷りのうへや」と表現するだけでは上の句と関連が薄い  
ことを難ずるか。

⑦たつことやすき、つねのことも―「なにはがたあさ  
みつしほにたつちどりうらづたひするこゑきこゆなり」  
(『後拾遺和歌集』冬・三八九・「永承四年内裏歌合にち  
どりをよみ侍る」)・相摸)などのように、千鳥が飛び  
立つことを詠んだ例は多くみえる。

⑧あら磯浪千鳥うては珍敷聞え侍れ―他本により「あら  
磯なみちとりにては」と改める。先行例の「いはこゆ  
るあら磯なみにたつちどり心ならでやうらづたふらん」  
(『千載和歌集』冬歌・四二六・「千鳥をよめる」)・道因)

では荒磯の激しい波に心ならずも浦づたいに飛ぶ千鳥を  
詠んでおり、当該歌のように荒磯波が寄せる情景であつ  
ても躊躇なく飛び立つ発想は珍しい。

【通釈】

十八番

左

河風（河風）が鳴（鳴）いているのが聞こえる。夜の氷の上が  
（冷たくて）哀しい（から鳴いている）のだろうか。

右 勝

行家

沖から吹く風（の為に）、あら磯波がますます激しく  
なるところに、ためらいなく飛び立つ小夜千鳥であるこ  
とよ。

〔判詞〕（「むは玉の」の下に）「よるの氷りのうへや」と  
言及なさっているのは、いかがかと見えます。「たつこ  
とやすき」（と言いますのは）、常のことでも、荒磯波千  
鳥においては珍しく聞こえますので、河風よりは興つ風  
の方が強く（勝つて）いるべきでしょうか。

〈十九番〉

【本文】

十九番

左 勝

夜をさむみ氷①の村千鳥②をのれや浪③に立かはらむ  
甲斐

右

為綱

風わたる河辺やさむきさよ千鳥更行浪に声そらむる

氷る汀といひて、をのれや浪にたちかはるらむ、

よろしくこそ待めれ、河辺やさむき、声そら

らむるといへるほと、すこしおとり侍へきにこそ

【校異】

A 汀―河（家） B 汀―河（書）

【他書所伝】

〔左歌〕

『題林愚抄』冬部中・千鳥・五四七二・同（河合社歌合）・

安嘉門院甲斐

よをさむみ氷る汀のむら千鳥おのれや浪に立ちかはるらん

〔右歌〕ナシ

【語釈】

①氷る汀―凍った水際。「さよふくるままにみぎはやこ

ほるらんとほざかりゆくしがのうらなみ」〔後拾遺和歌

集〕冬・四一九・「題不知」・「快寛」のように、水際が凍つ

て水際で波が立たなくなる様子を表現している。後例で

はあるが、「志賀の浦みぎはの波は氷るておのれのみた

つさ夜千鳥かな」〔続後拾遺和歌集〕冬歌・四五八・「建

長五年後嵯峨院に三首歌講せられける時、寒夜千鳥」・

通成）は当該歌と同様の発想で、水際が凍って波が立た

なくなり、千鳥だけが飛び立っている様子を詠んでいる

例。

②村千鳥―「むら千鳥たちある音のちかければみち

くる汐のほどぞしらるる」〔月詣和歌集〕十一月・

一〇〇五・「題しらず」・「実快」のように、むれをなして

いる千鳥、一群れの千鳥の意。

③をのれや浪に立かはるらむ―自分が波に立ち代わって

飛び立っているのだからか、の意。「立かはる」に波が

「立つ」の意と千鳥が「立つ」（飛び立つ）をかける。「立

かはる」を用いた掛詞の先行例では「よし野山みねのし

ら雪いつきえてけさは霞のたちかはるらん」〔古今和歌

六帖〕第一・一七・「ついたちのひ」・「重之」。「たごの浦

の風も長閑けき春の日は霞ぞ波に立ちかはりける」（治

承三年『治承三十六人歌合』八番右・一四九・「田子の

浦をよめる」・「道因」などのような詠が見えるが、千鳥

などの鳥が波に「立かはる」と詠んでいる先行例はみえ

ない。また、波が「立つ」の意と千鳥が「立つ」の意を

掛けた表現では、「しらなみのたちかへるまのはまちど

りあとやたづぬるしるべなるらむ」〔朝忠集〕一六・「か

へし」のように、波が立つと千鳥が飛び立つ、という

ふうに詠まれるが、当該歌では、波は立たないが、その

代わりのようにして飛び立つ千鳥の群れの様子を表現し

ている。

④更行浪―夜が更けるにつれて、風が吹いてゆき高く

なっていく波。「更行」というのは「さむしろや待つよ

の秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫」〔新古今和歌集〕秋歌上・四二〇・「家に月五十首歌よませ侍りける

時」・定家)のように、「風が吹く」の意と「夜が更ける」の意を掛けた表現。波と風が詠まれた歌では「か

ぜ吹けば波たかさこの友千鳥むれてたちゐる声のみぞする」〔田多民治集〕冬・九四・「千鳥」・「いそなつ

むあまのさをとめ心せよおき吹く風になみたかくなる」〔山家集〕雑・一一六五・「屏風の絵を人人よみけるに、

うみのきはに、をさなくいやしきもののある所を」などのように風が強く吹くと波が高くなるという詠がみえ

る。当該歌では、夜が更けるにつれて風が強く吹いてゆき、風が強く吹くにつれて波が高くなってゆく様子を表現している。後例だが、「おきつかぜふけゆくなみに月

さえて氷にのこるあはぢしまやま」〔澄覚法親王集〕秋・一五〇・「海辺月」は同趣の詠。

⑤声そうらむる―「ほのぼのとかすめる山のみねつづきおなじきぎすのこゑぞうらむる」〔拾遺愚草員外〕詠

四十七首和歌・二〇五・「春十首」のように、恨めしそうな声で鳴いている、の意。

⑥氷る汀といひて、をのれや浪にたちかはるらむ、よろしくこそ待めれ―上の句で「氷る汀」と言っておいて、

下の句で波が立つかわりに千鳥が飛び立つ、とした表現

の照応がまあよいと評価している。

⑦河辺やさむき、声そうらむるといへるほど、すこしおとり侍へきにこそ―「河辺やさむき」と「声そうらむる」という表現の組み合わせを難じているか。千鳥

が「うらむ」という表現には、「たれを又よぶかき風にまつ島やをじまの千鳥こゑうらむらん」〔正治初度百

首〕一三六八・「冬」・定家)、「よぶねこぐいらこがさきのはなれいしにともなしちどりこゑうらむなり」(正

治二年『三百六十番歌合』冬部・五十一番左・俊成)、「なみのうへにともなしちどりうちわびて月にうらむる

在明のこゑ」〔千五百番歌合〕冬・九百六十九番右・一九三七・雅経)などのように、「友なし千鳥」などの

孤独な千鳥が、その孤独を恨み友を呼んで鳴くとする詠が多くみえる。当該歌では、千鳥が恨めしそうな声で鳴

く理由を、川辺が寒いからであろうかと想像する詠になつており、為家は、上の句の「河辺やさむき」と下の

句の「声そうらむる」の表現の照応が左歌に比べて少々劣っていると判断したか。

【通釈】

十九番

左 勝

甲斐

夜が寒いので凍った水際にいる一群れの千鳥よ、自分(達)が波が立つのに立ち代わって、飛び立っているの

だろうか。

右

為綱

風が吹き渡っている川辺が寒いのであろうか。小夜千鳥が、夜が更けるにつれて風が吹いて高くなつてゆく波に、恨めしそうな声で鳴いている。

〔判詞〕（左歌は）「氷る汀」と言つて、「をのれや浪にたちかはるらむ」（と言っているのが）、よろしいようです。（右歌は）「河辺やさむき」（と言つて）、「声そうらむる」と言っているあたりは、少し劣っていますでしょう。

〔二十番〕

【本文】

甘番

左

能暹

神さふるみたらし河Aにすむ千鳥なれもうれへのねをや鳴らむ①

右 勝

為継

音さゆる賀茂の川風ゆふかけてなかき霜夜Bに千鳥鳴なり④

みたらし河にすむ千鳥なれもうれへと侍、をし⑥

こめていかと聞へ侍り、述懐の哥は、身をう⑦

らむCへくや、D本のまま、などをとふらはれやうにや聞

え侍へき、加茂の河風ゆふかけて、させるとか

なく侍れば、以右為勝

【校異】

A 河—ナシ（書） B 夜—ナシ（書）

C へくや—へく（刈・河）、へきとや（家）

D 本のまゝ、—本（内）、本まゝ、（家）

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①みたらし河にすむ千鳥—御手洗川と千鳥の組み合わせは、「妻にこひみそぎすらしもゆふかけてみたらし川に千鳥しばなく」〔拾塵和歌集〕冬歌・四四五・「千鳥」などにみられる。

②なれ—おまえ、の意。当該歌では千鳥を「なれ」と呼んでいる。用例としては「すまのせき有明のそらになく千鳥かたぶく月はなれもかなしき」〔千載和歌集〕冬歌・四二五・「千鳥をよめる」・俊成）などがみえる。

③うれへのねをや鳴らむ—「うれへ」は「むすびおく愁」のをだに露ならばとくる心もあらましものを」〔久安百首〕六三九・「秋二十首」・親隆、「空にみつうれへの雲のかさなりて冬の雪とも積りぬるかな」〔久安百首〕八五六・（冬十首）・俊成）などにみられ、悲しみや悲嘆、不安といった感情や状態を嘆き訴えることを表す。また、「千鳥」と「うれへ」の組み合わせは、「きくにうれへみるにこころぞあくがるちどりしばなき月さゆるよを」

〔伏見院御集〕一四七二・〔冬鳥〕にみられる。ここでは千鳥が我が身を憂えて声をあげて鳴いていることを指すか。

④音さゆる―「おとさゆる風のまにまにあられふり夢路たえねとなれる比かな」〔正治初度百首〕一二六四・〔冬〕・隆信)、「音さゆるよはのあらしも埋火のあたりは冬もなき心ちして」〔後鳥羽院御集〕同十一月七日新宮歌合・一五〇八・〔寒夜埋火〕などにみられ、冬に空気が冷たくなって、音が澄んでよく聞こえる状態であることをさす。

⑤ゆふかけて―「神がきのいはねにさせる榊葉にゆふかけてなく鈴虫のこゑ」(大治三年『西宮歌合』虫寄夕・七番右・一四・忠季)にみられるように、夕方になっての意と、幣として神事の折に榊にかけてたらす「木綿かく」の意が掛詞として詠み込まれている。「みむろ山いのるころもしらゆふのかけてやながく恋ひわたるべき」〔為家千首〕恋二百首・六五七)のように「長く」との縁語関係が考えられる。

⑥をしこめていか―「月影にうづもれぬとや思ふらむ雪にならへるこしの里人」(永万二年『中宮亮重家朝臣家歌合』月・五番右・六六・頼政)に対する俊成の判詞、「こしの里人やすこし荒涼ならむ、こしの国とこそ申すめれ、その国にもさだめて里はあらめど、おしこめてこしのさ

どといはむことはいかが」では「こしの国」にすむ「里人」を「こしの里人」と不適切に省略して表現したことを難じている。また、「ながめうれへ今宵の月に恋つきていさやあすまでたへじ我が身か」(永仁五年八月十五夜『歌合』寄月恋・十六番左・三一・少兵衛督)に対する判詞、

「左、心ざしおしこめて、そのすちとわりなく聞え侍るに、こひつきていさやわが身かなど、猶いひをさめぬ所侍るにこそ」では、本意がきちんと表現できていないために道理に合わないように聞こえ、「こひつきていさやわが身か」などの表現はやはりきちんと表現しつくせていない、と感情を表現するための言葉が追いついておらず、適切でないことを難じている。当該歌では、「みたらし河にすむ千鳥」がなぜ「うれへ」ているのかということが明示されておらず、言葉が不適切で歌にきちんと本意が表れていないことを難じたものか。

⑦身をうらむへくや<sup>本のまゝ</sup> などをとふらはれやうにや聞え侍へき―「やう」が体言であることから、その接続は連体形であるべきで、「身をうらむへくや<sup>本のまゝ</sup> などをとふらはるるやうにや聞え侍へき」が正しい形であると考えられる。「身をうらむへくや」から「など」までの本文が脱落しているが、仮に解釈すると、「詠者の」身の上を嘆くべきことがあるのか、などを(歌の享受者が詠者を)慰められるように(嘆く由縁を)申し上げるべきで

しようか」となる。当該歌では、なぜ千鳥が「うれへ」ているのか、その理由が詠み込まれておらず、為家は「をしこめていかゝ」と難じている。述懐歌は、詠者が何故述懐を詠んだのか、歌の享受者にわかるように一首の中に詠み込むべきだと為家が指摘していると考えられる。

【通釈】

二十番

左

能暹

神々しい御手洗川に住む千鳥よ。お前も我が身を憂えて声をあげて鳴いているのか。

右 勝

為継

(空気が冷たくなって)音が澄んで聞こえる賀茂の川風。夕方になってあたかも白く長い木綿をかけたように(これから)長い霜夜を一晚中千鳥が鳴くようだ。

〔判詞〕(左歌の)「みたらし河にすむ千鳥なれもうれへ」とございますのは、きちんと歌の中に本意が表現しきれずおろそかになるかと申し上げます。述懐の歌は、(詠者に何の)身の上を嘆くべきことがあるのか、などを(歌の享受者が)慰められるように(一首の中に述懐の内実を)申し上げますべきでしょうか。(右歌の)「加茂の河風ゆふかけて」は、さしたる欠点がございませんので、右(歌)を勝ちとする。

― 不遇恋 ―

〈二十一番〉

【本文】

廿一番

不遇恋<sup>①</sup>

左

為家

君たにもねてとたのめはもろこしのとらふす野へに百夜  
成とも

右 勝

蓮性

風<sup>④</sup>あらし浦<sup>⑤</sup>のとまやにたつ煙<sup>⑥</sup>こゝろやすくはなひきやは  
する

左、とらふすのへいかさまにも、物とをく聞え侍る

うへに、右、心やすくは<sup>⑧</sup>することにやさしくみえ

侍れは、浦<sup>F</sup>の返<sup>G</sup>くたかく立<sup>H</sup>まさり侍るへし

【校異】

A の―そ(内) B 煙―千鳥(書・内・家)

C は―も(刈・河) D 心―ナシ(書・内・家)

E する―なひきやはする(書・内・刈・河・家)

F 浦の―うらのとま屋(書・内・家)、浦の煙(刈・河)

G 返く―ナシ(刈・河)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』恋部四・寄猷恋・七九六五・「河合社歌合」  
為家

君だにもねてとたのめばもろこしの虎ふすのべにもも夜  
なりとも

〈右歌〉

『題林愚抄』恋部一・不逢恋・六五四五・「河合の歌合」  
知家入道蓮性

風あらしうらのとまやにたつ煙心やすくはなびきやはす  
る

【語釈】

①不遇恋―恋しい人と未だ会っていない状態での恋を意味し、「我が恋はよしのの山のおくなれやおもひ入れども逢ふ人もなし」(『堀河百首』恋十首・不遇恋・一一五七・顕季)のように自らの恋に対する歎きや、「いたづらにゆけどもあはでかへるかな君はふせ屋におひぬものゆゑ」(『俊成五社百首』伊勢大神宮百首和歌・恋十首・「不逢恋」・七三)のようにつれない相手を嘆く心情を詠んでいるものが多い。不遇恋を歌題にとるものは平安前期仁和頃成立と思しい『民部卿家歌合』が早くにみえる。

②とらふす野へ―早くは「有りとてもいく世かはふるか

らくにのとらふすのべに身をもなげてん」『拾遺和歌集』  
雑恋・一二二七・「をどこもちたる女を、せちにけさう  
し侍りて、あるをとこのつかはしける」がみえ、これ  
は釈迦が前世、飢えた虎へ我が身を与えたという『金光  
明勝王経』に典拠をもつ仏教説話を踏まえる。当該歌  
は、「とらふすのへはおそろしき事のためし也」『八雲  
御抄』枝葉部・虎」とあるように危険な場所の意。

③百夜——ここでは『奥儀抄』にみえる説話を踏まえる。  
男が求婚した女から百夜通つて榻の上に寝たならば結婚  
しようと言われ、男は通つた証拠に榻に印を書きながら  
九十九夜まで通つたが、百夜目に親が亡くなり通つて来  
られなかった。その男に対し、女は「暁のしぢのはしが  
きもよ」かきみがこぬよはわれぞかずかく」『奥儀抄』  
五四二」と詠んでいる。

④風——ここでは「ふくかぜになびくあさぢはわれなれや  
人のこころのあきをしらする」『齋宮女御集』一九二つ  
ゆもひさしと」のように風を男性からの言い寄りに比  
す。

⑤浦のとまや——「浦」は海の入り込んだところ。「とまや」  
は菅や茅を菰のように編んで屋根を葺いた家で、漁夫の  
住む小屋の様な家。先行例に「見わたせば花も紅葉もな  
かりけり浦のとま屋の秋の夕暮」『新古今和歌集』秋歌  
上・三六三・「西行法師すすめて、百首歌よませ侍りけ

るに」・定家）がある。

⑥こゝろやすくはなひきやはする——そう簡単に靡くだろ  
うか、いや靡きはしない、の意。「こゝろやすく」と「な  
びく」では適例は見当たらない。当該歌と類似した発想  
は「もしほやくうらのけぶりをかぜにみてなびかぬ人の  
こころとぞしる」『六百番歌合』恋部下・寄煙恋・廿八  
番右・九五六・信定）がみえ、酷く激しい風で煙がうま  
く靡かないことから思い人が自分の方にうまく靡いてく  
れないことを詠む。

⑦いかさまにも——どのように見ても、の意。「いづくよ  
り春はきぬらん天のとのあくるをまたずたつ霞かな」(宝  
治元年『院御歌合』早春霞・一番左・一・後嵯峨院)に  
対して為家は、「左のうた首尾あひかなひて心詞華麗の  
すがたにこそ侍るめれ、右のうた衣川氷しくばかりにて  
かけてもえうなくみえ侍るうへに、なほこほれるほどな  
らば霞いくへとまではことたがひてや侍らむ、いかさま  
にも以左為勝」と判じている。

⑧物とをく——ここでは「とらふすのへ」が恋歌で用いら  
れることはあつても不遇恋題で詠まれている例はみえな  
かったことから歌題から離れて聞こえることを指摘する  
と共に、「とらふすのへ」が距離的に遠いことを響かせ  
ている。「風わたるきさのをがはの水すみていよいよき  
よき月のかげかな」(文永二年『龜山殿五首歌合』河月・

十番左・一六・隆親) について「左歌、このかはもすこしものどほくや」とする為家の判がみえる。この例では、「きさのをがは」が「昔見し象の小川を今見ればいよよさやけくなりけるかも」『万葉集』巻第三・雑歌・「反歌」・三二六) や「我が命も常にあらぬか昔見し象の小川を行きて見むため」『万葉集』巻第三・雑歌・「帥大伴卿の歌五首」・三三二・大伴旅人) のように『万葉集』を源泉とした古めかしい表現であることを指摘していると思われる。「物とをし」の意味内容はある程度幅を持った表現といえよう。

⑨ やさしく―優美さを表す。「おもふともこふともしらし山城のときはの森の色にみえねど」(嘉禎二年『遠島御歌合』忍恋・五十番右・一〇〇・小宰相) に対して後鳥羽院は「右歌、おもふともこふともしらしといへる、やさしくみゆ、可為勝」と判じている。ここでは「こゝろやすくはなひきやはする」が相手がつれない様子をつまく表現しており、不遇恋で詠まれるのにふさわしい美しさであると評価するか。

⑩ 立まさり侍るへし―優れておりますでしょう、の意。「立」は煙の縁語。為家は「富士のねにたえぬ煙も心せよわが下もえの思ひあるよに」(建長三年『影供歌合』寄煙忍恋・百七十四番左・三四七・実雄) でも「わがしたもえのおもひあるよに、よろしくきこえ侍るを、心せ

よとはいか申す人侍りしかども、せめてなほしたにはなびけ、いうには侍れど心おぼつかなくやと申して、ふじのけぶり立ちまさるよしさだめられし」と判じている。

【通釈】

二十一番 不遇恋

左

為家

せめてあなた(の方から)夜も寝ないで(私のことを思い続けてほしいと)あてにさせるのなら(私はあの危険な)唐土の虎が臥すという野辺に百夜であっても(寝よう。そうまでしてでもあなたに逢いたい。)

右 勝

蓮性

風が激しく吹いている海辺の漁師の小屋から立っている煙がそう簡単に靡くだろうか、いや靡きはしない。(どんなに私が激しく吹く風のように言い寄ってもあなたはその風にうまく靡かない煙のように私の方にはそう簡単に靡いてくれない。)

「判詞」左(歌)は、「とらふすのへ」がどのように見ても、(歌題から)離れているように聞こえます上に、右(歌)は、「心やすくはなひきやはする」(という表現が)とりわけ優美に見えますので、うらのとま屋の(歌の)方が全く優れておりますでしょう。

〈二十二番〉

【本文】

廿二番

左

信実

徒に恋をしこふるわかためし岩にも松のたねをやはみむ

右勝

真観

身は捨ついまは此世に逢ことをなにかへてか恋わたる

らん

右、初の五もしをよみあげ侍より、作者によりて

はことほりもかなひ、こゝろ言葉もゆうに侍るを、

詠吟し侍ほとに、左の岩にも松のふるきためし

も、いたつらに申おとし侍りぬるにや

【校異】

A 右—左（書・内・家） B よりてはことほりもかなひ、こゝろ言葉もゆうに侍る—より侍る（書・内）、

よ□侍□（家） C ふるき—ふかき（内）

D に—ナシ（書・内・家）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』恋部一・不逢恋・六五四六・「(河合の歌合)」・

真観

身はすてつ今はこの世にあふことをなにかへてか恋ひ

わたるらん

【本歌】

〈左歌〉

『古今和歌集』恋歌一・五二二・「(題しらず)」・よみ人し

らず

たねしあればいはにも松はおひにけり恋をしこひばあは

ざらめやは

【参考歌】

〈右歌〉

『御室撰歌合』春・十二番左・二三・生蓮

身はすてついまは此世に花ならで何に心をとどめおくべ

き

【語釈】

①徒に—「いたづらに行きてはきぬるものゆゑに見まく

ほしさにいぎなはれつつ」『古今和歌集』恋歌三・六二〇・

「(題しらず)」・よみ人しらず) のように、何の甲斐も得

られないさまを表す。

②恋をしこふる—恋慕い続ける。「いはき山なげきも種

は有るものを恋せし恋は松ならずとも」『壬二集』恋部・

二八八六・「恋歌あまたよみ侍りしに」(二) のように、本

歌をもとにした表現。

③わかためし—(本歌のように)はうまくいかない) 私と

いう例、の意。「よしさらば恨みもはてじ岩におふる松

のためしも有りところそきけ」（建久六年『民部卿家歌合』久恋・六番左・一九五・公継）のように、本歌をもとに詠まれた先行例の中には、「岩にも松が生えた（のだから思い続ければ逢える）」ことを「ためし」で表す例がみえる。当該歌も本歌を念頭に置いた表現と思しいが、「わかためし」としたのは、本歌以来の、思い続ければ逢えるという「ためし」とは異なるという意を含むためか。

④岩にも松のたねをやはみむ―岩にも（生えるという）松の種がどうして見えるだろうか、いや見えないだろう。恋歌での「岩にも（生えるという）松（の種）」は、「いはがうへにおひぬるまつのたねをのみたのむばかりのなぐさめぞうき」（『千五百番歌合』恋二・千二百四番右・二四〇七・越前）のように、「思い続ければ逢えること」の喩えとして詠まれている。当該歌では、もともとなる種が見えないことから暗に逢えないことを表現する。種の有無ではなく「やはみむ」という可視、不可視の表現にしたのは歌題「不遇恋」に沿い「恋人と逢う」という意味に重きをおいたためか。なお、信実はその歌合以前に「岩の上に種なき松は生ひぬともわがあらましのはてはたのまじ」（『洞院撰政家百首』恋・「不遇恋五首」・一一五一）と詠んでいる。

⑤身は捨つ―出家した、の意。出家後も恋慕う気持ちを

詠んだ例は「うきながらさても有る世の身をすてたがためとてか人をこふらん」（『為家集』恋・一一八六・恋歌／嘉禎元）など。

⑥恋わたる―恋し続ける。「いはねふみかさなる山はなけれどもあはぬ日かずをこひわたるかな」（『人丸集』・二〇七・「みかどたつた河のわたりにおはします御ともにつかうまつりて」）などのように、古くからみえる表現。

⑦作者によりてはことほりもかなひ―俊成が「すみよしときこゆるさとにいとはずはおきどころなきみやとさばや」、「すぎていにしあきにおくれてしもがるるきくやわがみのたぐひなるらむ」（嘉応二年『住吉社歌合』述懐・二番・一〇三、一〇四・公重、円実）に対して「かやうのうたすこしは人によることあり、左歌はこころぐるしきやうながら、又おろかにきこゆ、女のうたならば優なるべきにや、右歌は、孤露のよしをうれへたるにとりて、貴種のやからしかも花の最第のこころにかなはば、いよいよをかしかるべし」と判じているように、歌と作者像の結びつきは重視されていた。当該歌では詠者真観が既に「身は捨つ（出家）」しているため、逢うために「身を捨てる（命を捨てる）」ことができないと、言葉遊び的に詠じている点を評価する。

⑧岩にも松のふるきためしも、いたつらに申おとし侍り

ぬるにや—先述の通り、「岩にも（生える）松（の種）」は、「一心に思い続けければ逢える」ことの喩え（ためし）であった。左歌ではそれを「わかためし」とし、「思い続けても逢えない」という本歌以来とは異なった読み方をしている。為家はこの点を本歌を活かしていないものと判断し、初句に響かせ難じたか。なお、「色色の木の葉に路は埋もれて名をさへたどる白川の関」（嘉応二年『建春門院北面歌合』関路落葉・一番右・二・俊成）に対して、俊成は自ら「右歌は、判者のつたなきことのはに侍りけりとはみたまへながら、歌人をかくされて侍れば、白川のせきはことに名にながれたる所なるを、しひて申しおとさむもあやしくやと思ふ給ふ」と判じている。

【通釈】  
二十二番

左

信実

むなしく恋慕い続ける私という例では、（思い続けければ逢えることの例である）岩にも（生えるという）松の種がどうして見えるだろうか、いや見えないだろう。

右 勝

真観

出家した身なのだ。今となってはこの世で逢うことを何とひきかえに（するつもりで）恋慕い続けているのだろうか。

【判詞】右（歌）、初句の五文字を詠みあげますと、作者

によつては道理も適い、内容や表現も優美でございませうが、（一方で同じように）詠吟しますところ、左（歌）の「岩にも（生えるという）松（のように思い続けければ逢える）」の古くからの例も、無駄に詠み落としましたでしょうか。

（二十三番）

【本文】

廿三番

左 持

光成

年ふれとあふみの海は名のみしてみるめよせこぬ志賀の浦浪<sup>①</sup>

右

少将弟

有明をつれなしとたにならねはわかれをしらぬあかつき<sup>④</sup>さうき<sup>⑤</sup>

左は、詞つよくてちからあるさまに侍るにや、右は、心かすかにしてゆふに侍れば、れいの持と定申<sup>⑦</sup>へし<sup>⑧</sup>

【校異】

A しらぬ—しら□（家） B は—ナシ（書）

C にして—にて（書・内・刈・河・家）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

## 【本歌】

〔右歌〕

『古今和歌集』恋歌三・六二五・「題しらず」・忠岑  
有あけのつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし

## 【語釈】

①あふみの海は名のみして―「あふみの海」は近江国の歌枕。現在の滋賀県の琵琶湖。「流れいづる涙の河のゆくすゑはつひに近江のうみとたのまん」(『後撰和歌集』恋五・九七二・「題しらず」・よみ人しらず)のように、恋歌においては「あふみ」に「逢う身」の意を掛けた表現が多い。淡水ゆえ生えない「海松布」に「見る目」を掛けて逢えないことを詠みこむ例も多い。また、「名のみして」という表現は「さざなみやあふみの宮は名のみして霞たなびき宮ぎもりなし」(『拾遺和歌集』雑上・四八三・「大津の宮のあれて侍りけるを見て」・人麻呂)のような先行例があり、「あふみ」は「逢う身」という名前から、逢えない相手との逢瀬を期待させるものの、それは名前ばかりのことだ、とする。

②みるめよせこぬ―近江の海が海松布を波に乗せて寄せてくることがないように、恋人との逢瀬の機会も寄つてはこない。「みるめ」は、「海松布」と「見る目」の掛詞。「海松布」は海中の岩に生える緑色の海藻。「見る目」は、男女の逢瀬の意。「みるめこそあふみのうみに

かたからめ吹きだにかよへしがのうらかぜ」(『伊勢大輔集』一四八・「なりのぶとまだうちとけざりしころ、いし山にこもりて、ひさしくおとせざりしかば」)のように、ほとんどの場合、「海松布」と「見る目」の掛詞に用いられる。また、それを踏まえて「海松布」を逢瀬の暗喩とすることもある。

③志賀の浦浪―「志賀の浦」は琵琶湖の西岸。「浦浪」は海岸に打ち寄せる波。「おもひきやしがのうら浪たちかへり又あふ身ともならむものとは」(『千載和歌集』雑歌中・一一二〇・「心のほかなることにてしらぬくにしまかれりけるを、ことなほりて京にのぼりてのち、日吉の社にまゐりてよめる」・康頼)のような例がある。また「浦浪」は、「さざなみやしがのうらなみうらめしとおもふはかひもなきさなりけり」(『続詞花和歌集』恋下・六四一・「題不知」・師時)のように、「恨み」を掛けて用いられることもあるが、不遇恋題においては、「もしほくむあまだにすまぬ都にもあはぬ恨の袖はぬれけり」(『壬二集』恋部・二七九二・「不会恋」)のような例があるものの、恋の相手を恨むような歌はほとんどみられない。

④有明―夜が明けかかっても月が空にかかっている時分。また、その月。ここでは、有明の月。後述する『蹟註密勘』の注によると、本歌としている『古今和歌集』

歌では、視点人物は夜明けになって女と別れて帰らなければならぬのに、有明の月は、夜が明けてもそ知らぬ顔でまだ空に居残っているので冷淡に見えた、と詠んでいると解される。

⑤ つれなしとたにならねは—冷淡なものだと感じることにすら馴染みがないので。「つれなし」は、二つの物事の間に関連がないこと、こちらからの働きかけに対して反応がないこと、意。恋歌では、相手がそしらぬ顔で平然としている様子や、冷淡な様子を表す。「ならふ」は「ならはねばかりのわかれもわびしきをうとくぞすこしなるべかりける」(『能因法師集』八一・「道濟朝臣筑前になりてくだるに、詠二首送之寛和四」)のように、慣れる、経験を重ねる、の意。「有明」を「つれなし」と感じるといふのは、本歌を踏まえた表現。

⑥ わかれをしらぬあかつき—まだ後朝の別れを知らない。後朝の別れを知らずに迎える。『曉』は男が女と別れて帰る時間。本歌とする『古今和歌集』歌の解釈には、古くから複数の説が存在する。『古今和歌集』の配列や『古今和歌六帖』の題「くれどあはず」からすると、本歌は恋人を訪ねたが結局朝まで逢えなかつたという詠に解される。一方、『頭註密勘』で、頭昭は、「是は、女のもとよりかへるに、我はあけぬとて出るに、有明の月はあくるもしらす、つれなく見えし也。その時より曉はうくお

ほゆともよめり。たゝ女にわかれしより、曉はうき心也」と注しており、また、定家は「つれなく見えし、此心こそは侍らめ。此詞のつゝきはよはず、艶にをかしくもよみて侍かな。是ほとどの哥一よみいてたらむ、此世の思いて侍べし」と注している。この注によると、頭昭や定家は、本歌をいわゆる後朝の別れを詠んだ歌と解し、視点人物は夜明けになって女と別れて帰らなければならぬのに、有明の月は、夜が明けてもそ知らぬ顔でまだ空に居残っているので冷淡に見えるとする。

当該歌は、『頭註密勘』の注と同様の解釈に基づいて本歌としてしていると解するのが妥当。後朝の別れの辛さを詠んでいる本歌を踏まえ、その後朝の別れすら経験できない視点人物はそれよりも更に辛い、と詠んでいるのである。

⑦ 詞つよくて—読み手に強く訴える表現で、の意。例えば定家は「やはた山神やきりけむ鳩の杖おいてさかゆく道のためとて」(寛喜四年『石清水若宮歌合』社述懐・四十四番右・八八・家長)に対し、「右のうた、神やきりけんは、ふるきことばをやはた山に寄せて、鳩の杖ことにつよく聞え侍れば、勝と可申や」と判じている。

⑧ 心かすかにしてゆふ—歌の心が、深遠で優美な様子であることをさす。定家は『宮河歌合』の跋文で「事的心かすかに歌のすがたかくして、空よりも及びがたく、

雲よりもはかりがたし」と記している。「ゆふ」は「優」で、典雅で上品な美しき、柔和でしとやかな美しさを表す。また、「今やこれ秋おく露のにひむすび時はきにけり袂すずしも」（建長三年『影供歌合』初秋露・十二番左・二三・蓮性）に対して、判者の一人である西園寺実氏が「同じく万葉集の歌をとるも、あらはに聞えずいなるさまにとりなすべきよしうけ給り侍りき」と、露骨に表現するのではなく、奥深い優美な様に詠むべきだと指摘しているように、あえてはつきりと詠まずに遠まわしに表現することを「優」とすることがある。

【通釈】

二十三番

左 持

光成

長く年月を経たけれど、「逢う身」という名の近江の海は名前ばかりであって、近江の海が海松布を波に乗せて寄せてくることがないように、逢瀬の機会も寄せてはこない志賀の浦波よ。

右

少将弟

有明の月を、冷淡なものだと感じることにさえ馴染みがないので、まだ後朝の別れを知らない暁が、本当につらく感じられる。

〔判詞〕左（歌）は、読み手に強く訴える表現で力強く感じられる様でございましょうか、右（歌）は、歌の心

が深遠で優美でございしますので、例の持と定め申しあげよう。

（二十四番）

【本文】

廿四番

左

為教

※逢ことはかた野のおきにこく船のみるめもしらて世を渡るかな

右 勝

左京大夫

わか恋は名たかの浦のなひきもの心はよれとあふよしもなし

左は、かた野<sup>B</sup>、おきにこく船のみるめもしらぬとい

へる。

こと葉、めつらしからす侍るにや、右は、なたかの浦<sup>F</sup>

のなひきも心はよれと侍姿、やさしく侍れは<sup>I</sup>

可為勝

【校異】

A かた野―かたゝ（書） B かた野―かたゝ（書）

C いへる―いへ□（家） D こと葉―とは（書・内）

E から―□□（家） F 浦の―うら□（家）

G も―もの（刈・河） H 姿―ナシ（書・内・家）

I は―ナシ（家） J 可為勝―か□とすへし（家）

※「かたゝの沖の写誤なるへし」の注記あり（刈・河）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『万代和歌集』恋歌一・一八五〇・「河合社歌合に」・少将内侍

わがこひはなだかのうらのなびきものこころはよれどあふよしもなし

建長三年『閑窓撰歌合』卅八番左・七四・少将内侍

我が恋はなだかの浦のなびきものはよれどあふよしもなし

『続拾遺和歌集』恋歌二・八三七・「(題しらず)」・院少将内侍

わがこひは名だかの浦のなびきものはよれどあふよしもなし

【本歌】

〈右歌〉

『万葉集』卷第十一・物に寄せて思ひを陳ぶる・二七八〇  
紫の名高の浦のなびき藻の心は妹に寄りにしものを

【語釈】

①かた野―交野。現在の大阪府交野市・牧方市交野町。嘗て牧野・渚・禁野で、行幸・遊獵が行われ、特に禁野は「みかりするかた野のみにふる藪あなかままだき鳥

もこそ立て」(『久安百首』冬十首・五六・崇徳院)のよ

うに、和歌に詠まれている。また、「またやみむかたの

のみの桜がり花の雪ちる春のあけぼの」(『新古今和歌集』春歌下・一一四・撰政太政大臣家に、五首歌よみ侍りけるに)・俊成)のように、桜をはじめ、御野・雉・

雪・卯の花などとの組み合わせでも詠まれているが、当該歌の「おき(沖)」「船」ように水場に関係する語と詠

まれた例はあまりみられない。よって、沖、浦、船など湖に関連した語と共に詠まれる「かたゝ(堅田)」に本文を改める。堅田は近江国の歌枕。琵琶湖南西岸の地

を指す。当該歌では、「あふ事はかただのあまのぬれ衣しぼりかねても身をぞ恨むる」(『洞院撰政家百首』恋・一四四〇・「怨恋」・範宗)などのように「かた」に「難し」と掛ける。

②みるめもしらて―湖である堅田の沖へ漕ぐ船が海に生える海松藻を知らないことと、自分が相手と逢う機会のないことを掛けた表現。「みるめこそあふみのうみにか

たからめふぎだにかよへしがのうら風」(『後拾遺和歌集』恋三・七二七・「高階成順石山にこもりてひさしうおとし

はべらざりければよめる」・伊勢大輔)、「浮ねする枕の

下の海におふるみるめもしらぬ身を歎かな」(『洞院撰政家百首』恋・一一四二・「不遇恋五首」・範宗)などが例。

③名たかの浦―黒江湾の歌枕。和歌山県(紀伊国)北西部、海南市名高の海岸。当該歌では「わがこひはなだかのうらのはま千鳥をはにもふれぬきみがみゆゑに」(『古今和歌六帖』第三・一九三二・千鳥)・朝忠のように、地名の「名たか」に噂が世に知られる意の「名高し」を掛ける。

④なひきも―靡き藻。流れや波のままに靡いている藻。「なひきも」を相手に心を寄せている自分に見立てて詠ずる和歌もみえる。当該歌の本歌や「白浪のよるにはなびくなひきものなびかじと思ふわれならなくに」(『和泉式部集』四三二・「やむ」となきをとこに)がその例。

⑤かた野々おきにこく船のみるめもしらぬといへること葉、めつらしからす―「かた野」は他本により「かた」に改める。「なにせんにかよひそめけむあふみぢはさらにかただのうらみありけり」(『頼輔集』五八・(同百首に、遇不遇恋))のように、「堅田」の詠み込まれた恋の和歌の多くが「堅田」と「難し」を掛け、また、堅田の沖、つまり琵琶湖が淡水であることから「逢ふ」を掛けた「あふみ(近江)」などを詠むことで「海松藻(会う機会)」がない(逢うことが難しい)ことを表現している。判詞の「めつらしからす」は右歌が他の「堅田」の歌に対して特に新しさが無いことを難ずる。

⑥なたかの浦のなひきも心はよれと侍姿、やさしく侍

れ―「靡き藻」という表現にあるたおやかさを、「やさし」といつて柔和で女性的な優美さがあると評価する。「藻」が詠み込まれた和歌を「やさし」と評した例では、「なみだ川袖の玉藻の下みだれ人やはしらんせく方もなし」(嘉禎二年『遠島御歌合』忍恋・五十一番左・一〇一・基家)に対する後鳥羽院の判詞「左右ともになだらかに見ゆれども、袖の玉藻のしたみだれ、猶やさしくきこゆ、仍以左為勝」などがある。

【通釈】

二十四番

左

為教

(あなたと)逢うことは(湖である)堅田の沖へ漕ぐ船が(海に生える)海松藻を知らないで渡るように難しく、逢うことを知らないままで世を過ごしていることだなあ。

右勝

左京大夫

私の恋は世間に広く噂が広まっているとおり、名高の浦の藻が靡いているように心は(あなたに)靡き寄っているけれども、(あなたと)逢う方法もない。

〔判詞〕左(歌)は、堅田の沖へ漕ぐ船が海松藻を知らないと言っている表現は、目新しくないでしょうか。右(歌)は、名高の浦の藻が靡いているように心は靡き寄っているけれどもごさいます表現は、優美でごさいます

ので勝ちとしよう。

〔二十五番〕

【本文】

廿五番

左

宿衿成茂<sup>A</sup>

人<sup>B</sup>しらぬ袖<sup>①</sup>のしづくやみちのくのいはて忍<sup>②</sup>ふの山川<sup>④</sup>の水

右 勝<sup>C</sup>

永光<sup>B⑥</sup>

富士<sup>⑤</sup>のねになひくを人の心ともならぬおもひにたつ煙<sup>E</sup>かな

左、いはてしのふの山河も、こゝろのおくしられて

ふかくみえ侍るを、右、なひくを人の心ともなら

ぬおもひにといへるふしのけふりめ<sup>③</sup>つらしく、

めにたち侍れば、又以右為勝

【校異】

A 宿衿—ナシ (書・内・刈・河・家)

B しらぬ—しれぬ (刈・河) C 勝—ナシ (書)

D ならぬ—なさぬ (河)

E 煙かな—け□□□□ (家) F と—も (書・内・家)

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①袖のしづく—袖に落ちる涙。袖は涙とともに多く詠まれ、間接的に涙を表す。「よそにふる人はあめとや

おもふらんわがめにちかき袖の雫を」(『和泉式部集』五四五・「いかなる人にかいひ侍る」) などはその例。

②いはて—磐手。陸奥の歌枕で現在の岩手県一帯を指す。「みちのくのいはて忍ぶはえぞしらぬかきつくしてよつ

ぼのいしづみ」(『新古今和歌集』雑歌下・一七八六・「前大僧正慈円、ふみにてはおもふほどの事も申しつくしが

たきよし、申しつかはして侍りける返事に」・頼朝)のように、地名に「言わで」をかけて、思うことを言わず

にいる辛い心境を述べる事が多く、次第に「忍恋」の心に寄せて詠まれるようになる。

③忍ふ—人に知られぬよう感情を抑える、秘密にする。主に恋歌に用いられ、恋の初期段階で、恋の思いを自分

の心のうちに抑制する、あるいは二人の仲が表ざたにならないよう秘密にする、という意。陸奥国の歌枕で現在の福島市域を指す「信夫」と連想関係にあり、「みちの

くのしのぶもぢずりたれゆゑにみだれむと思ふ我ならなくに」(『古今和歌集』恋歌四・七二四・「題しらず」・融)

といった例がみえる。

④山川の水—「風ふけば花のしらなみいはこえてわた

りわづらふ山がはのみづ」(『新勅撰和歌集』春歌下・九八・「題しらず」・西行)などがみえるが、当該歌では「まだこえぬあふさかやまのいはしみづ」むすばぬ袖をしぼる

ものかは」(『新勅撰和歌集』恋歌二・七五四・「恋歌よみ

侍りけるに「・殿富門院大輔」のように涙を暗示する。

⑤富士―駿河国と甲斐国との境にそびえる休火山で、駿河国の歌枕。平安時代には、活火山として都の人々に知られていた。恋の歌、とりわけ「思ひ」に「火」をかけた「煙」の縁語としてよく詠まれる。「ふじのねをよそにぞききし今はわが思ひにもゆる煙なりけり」〔後撰和歌集〕恋六・二〇二四「思ひかけたる女のもとに」・朝頼などが例。

⑥ならぬおもひ―「ふじのねのならぬおもひにもえはもえ神だにけたぬむなしけぶりを」〔古今和歌集〕雑体・「題しらず」・一〇二八・紀乳母)のように、火になりきれず煙だけを吐く富士山を、火のない(成就しない)恋心に喩えて詠んでいる。

⑦ふかくみえ―「しのお山忍びて通ふ道もがな人の心のおくも見るべく」〔伊勢物語〕第十五段・二三・男)のように、陸奥の信夫は奥深いところと認識されており、木々の下にある山川を詠じたことも含めて指摘するか。

⑧めつらしく、めにたち―「もゆれどもしるしだになき富士のねに思ふ中をばたとへざらん」〔貫之集〕五六七・「恋」)のように、自分の心を富士の煙立つ情景に重ねて詠ずるのが常であるが、ここでは自分の思いから立つ火の煙が相手に伝わらないという詠みぶりを「めつらしく」と判じたか。「めにたつ」は、「あしびき

のやまどりののをながき日にあかでも花をひとりかも見る」〔千五百番歌合〕春三・百六十九番右・三三八・家長)に対する俊成の判詞「右はことごとしきさまの風体には見え侍れど、またさすがにことなる事はべらぬうへに、上下の句のはじめの字おもきとがにはあらざれど、めにたつように侍るめり」のように消極的評価が使われることが多いが、ここでは「君が代の千とせも秋ぞあらはるるよものしぐれに残る松が枝」(建保二年「内裏歌合」五十三番右・一〇六・家隆)に対する定家の判詞「右の、よもの時雨に残る松が枝、猶めにたちてよろしくみえ侍れば、勝とす」のように積極的に評価している。

【通釈】

二十五番

左

成茂

あの人は知らない私の袖(に落ちる涙)の雫は、陸奥の岩手や信夫(の名)のように恋しい思いを口に出さず忍んでいる山川の水なのだ。

右 勝

永光

富士山の嶺から靡いているのに、それがあなたには分かってもみえず、実ることもない(恋の)思い(の火)のせいで立つ煙であるよ。

〔判詞〕左(歌)は、「いはてしのふの山河」も、心の奥が自然と知られて深く見えますのを、右(歌)は、「な

ひくを人の心ともならぬおもひに」と表現している富士の煙が珍しく、目立っていますので、又右（歌）を勝とする。

〈二十六番〉

【本文】

二十六番

左 勝

兵衛督

かりにたによる船もなし浪たかき浦のみるめのしたの<sup>A</sup>③  
かれは

右

為氏

おもひわひつらさのまゝに恋しなは此世はさても後そか  
なしき

左は、詞つよく心たしかに、右は、たいかすかに姿よ  
はく侍れは、作者をとりかへはよとそみえはへる、  
女房の哥のよはきこそゆるさるゝ事に侍れは、尤  
以左為勝

【校異】

A したのこかれ―下 こかれ(書)、した<sup>本</sup>こかれ(内)、  
した<sup>落敷</sup>こかれ(家) B の―ナシ(刈・河)

C 侍れは―侍れ口(家)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』恋部一・不逢恋・六五四七・(河合の歌合)・  
鷹司院兵衛督

かりにだによる舟もなし波たかき浦のみるめの下のみだ  
れは

〈右歌〉

『題林愚抄』恋部一・不逢恋・六五四八・(河合の歌合)・  
為氏

思ひわびつらさのままに恋ひしなばこの世はさても後ぞ  
かなしき

【語釈】

① かりにたに―せめてかりそめにも。「かりにだに」人こ  
そとはね故郷の桜は雪と庭にしけども」『後鳥羽院御集』  
建仁元年九月五十首御会・一一六七・「庭上落花」など  
が例。

② 浪たかき―当該歌では「おぼろけのあまやはかづくい  
せの海の浪高き浦におふるみるめは」『後撰和歌集』恋  
五・八九二・「返し」・伊勢)のように、近づくことが容  
易ではないことを表している。

③ したのこかれ―密かに心の底に恋焦がれる気持ち。「か  
やり火はけぶりのみこそたちあされたのがれはわれ  
ぞわびしき」『相模集』五四三・「夏」)などが例。

④ 後そかなしき―「こひしなむのちはなにせんいける  
日のためこそ人の見まくほしけれ」『拾遺和歌集』恋

一・六八五・「(題しらず)・百世」と類似する発想か。当該歌では「此世」の「後」、つまり後世を指す。

⑤心たしか―題の心がはつきりしている、の意。「まてといふになかずもあらば郭公なにをさ月とおもひわかまし」(宝治元年『院御歌合』五月郭公・卅四番右・六八・弁内侍) に対する為家の判詞「右ふるきこと葉おほく聞えてよろしきすがたには侍るを、このころたしかにおもひわきがたく侍る」などがみえる。

⑥たいかすか―「をりてこそ見るべかりけれゆふつゆにひもとくはなのひかりありとは」(『六百番歌合』夏部・夕顔・十三番右・二六六・家房) に対する俊成の判詞「左、題の心かすかにやは侍る、只夕顔の花とはいはで、などは、はなの夕がほとはいへるにか」などのように、題を詠みきれしていないことをいう。

⑦姿よはく―当該歌合より後例となるが、「露をおもみもとくだちゆく萩がえのおなじかげにもやどる月かな」(文永二年八月十五夜『歌合』漸傾月・六十四番右・一二八・為家) に対する判詞、「右、露の萩におけるすがたちからよわくことばかざりて侍る」などがみえる。

⑧女房の哥―女房の歌について貫之は、小野小町を例に「あはれなるやうにてつよからず、いはばよきをうなのなやめる所あるにいたり、つよからぬはをうなのうたなればなるべし」(『古今和歌集』仮名序)などと、女歌の嫺々

たるさまを述べている。歌合では、「秋くれしもみちのいろをかさねても衣かへうきけふのそでかな」(『千五百番歌合』冬一・八百四十番右・一六七九・定家) に対する定家の判詞、「もみちの袖の色よわくみえ侍るにや、女房の歌などならばゆるさるるかたも侍りなん」などが見える。

【通釈】

二十六番

左 勝

兵衛督

かりそめに寄る舟もない(し、あなたも逢いに来てくれない)。浪が高く(易々と近寄せない)浦に生える海松布(私)の密かに恋焦がれる思いは。

右

為氏

(あなたのことを) 思い悩んで耐え難く思うままに恋に死んでしまえば、此の世はそうであつても、後世は(この辛い恋心を引きずつて) もつと悲しいことだ。

〔判詞〕左(歌)は、詞つよく(題の)心もたしかで、右(歌)は、題がはつきりせず(歌の)姿が弱くありますので、作者を取り替えようと見えることです。女房の歌が弱いことこそ許されることでありますので、いかにも左を勝とする。

〈二十七番〉

【本文】

廿七番

左 持

少将

逢<sup>①</sup>までと恋に命のなからへは<sup>A</sup>うきをかきりの世をや尽さ

む

右

円空

天<sup>③</sup>の原とよはた雲の立まよひ空<sup>⑥</sup>にみたるゝ恋をするかな

左<sup>B</sup>哥、心こと葉<sup>C</sup>えんに侍を、うきをかきりと侍

そ、をのつから逢<sup>⑧</sup>ことありともう<sup>D</sup>へきかと聞ゆ

へきかた侍へき、右哥、とよはた雲のたちまよ

ひ空に乱るゝ恋<sup>E</sup>もするかなと侍<sup>F</sup>、たけあるさま

にてさのみまくへき姿に侍らぬに、あはぬ恋の

こゝろおほつかなくやとみえ侍れとも、かやうの恋

の哥、みなあはぬかほにはさしてきこゆる事

侍らぬは、ともよろし、持にて侍れかし<sup>H</sup>

【校異】

A なからへは―惜ければ(書) B そーナシ(家)

C おのつから―をのつつから(家)

D うる―見る(書・内)、うかる(刈・河)、こかる(家)

E も―を(書) F 侍―侍り(書)

G たけあるさま―た□あるさま(家)

H 侍れかし―侍るらし(書・家)

【他書所伝】

〈左歌〉

『続古今和歌集』恋二・一〇六五・「題不知」・藻壁門院少将  
あふまでのこひにいのちのながらへばうきをかきりのよ  
をやつくさん

〈右歌〉 ナシ

【語釈】

①恋に命のなからへは―恋に期待して命がなからえるな  
らば。「ながらへば」つらき心もかはるやとさだめなき世  
をたのむばかりぞ」『千載和歌集』恋歌一・六七九・「題  
しらず」・頼輔)のように、恋の成就を期待して生きな  
がらえようとすること。

②うきをかきりの世―つらさを極めた人生。「うきをか  
きり」は、「いまはわれうきをかきりとながめても心の  
外はなれし面かけ」『寂蓮法師集』一一四・「恋」のよ  
うに、つらいことの極みの意。

③天の原―大空、天空。「あまのはらふみとどろかしな  
る神も思ふなかをばさくるものかは」『古今和歌集』恋  
歌四・七〇一・「題しらず」・よみ人しらず)がその一例。

④とよはた雲―「とよ」は美称。美しく大きく旗がひる  
がえるようにたなびいている雲。「わたつみの豊旗雲に  
入り日さし今宵の月夜さやけかりこそ」『万葉集』巻第  
一・雑歌・「反歌」・一五)が早い例。

⑤立まよひ―「立まよふ」は、空にただよう、あるいは、たちこめる、の意。「夕がすみおのれが空に立ちまよひいづちよるべく波ち尋ねん」(『建保名所百首』恋二十首・七四二・「霞浦陸奥国」・範宗)、「たちまよふ雲のはたての空」(と煙をやどのしるべにぞとふ」(『拾遺愚草』雑・旅・二六七七・「建仁三年秋和歌所歌合、羈中暮」)などの例がある。

⑥空にみたるゝ恋―空に乱れるように、上の空になつて乱れる恋。「空」は、「いつとなく心そらなるわがこひやふじのたかねにかかるしらくも」(『後拾遺和歌集』恋四・八二五・「永承四年内裏歌合によめる」・相摸)のように、「天空」の意と「上の空」の意の掛詞。

⑦えん―艶。上品で優雅な美しき、明るく華やかな美しさ。「優艶」、「妖艶」なども同類の概念を表す。為家は、「つれなくぞいきてつらさを歎きけるあふにかへてし命ならずや」(宝治元年『院御歌合』逢不遇恋・九十七番左・一九三・為経)に対して「いきてつらさを歎きける、あふにかへてし命ならずやと侍るこそ、ことに艶に侍れ、右すてがたく侍れども、左なほ勝つべきにや」と判じている。

⑧をのつから逢ことありともつるへきかと聞ゆへきかた侍へき―底本「うる」では意味が通らないので、他本により、逢瀬を遂げる意の「見る」に改める。自然と逢う

ことがあるとしても逢瀬を遂げるものかと言っているように聞こえるところがあつてしよう、の意。「うきをかきり」という表現では、恋を諦めようとしているかのようにも見える可能性があるもので、不遇恋題においては不適當な表現であることを指摘しているか。

⑨たけあるさま―崇高壮大で格調ある風体。「たけ」は歌の格調、風格のこと。為家判の例では、「春はいまとわたりくらし天のはら雲井はるかに今朝はかすめる」(宝治元年『院御歌合』早春霞・十番左・一九・蓮性)に対する「左とわたりくらしあまの原雲井はるかになどたけあるさまに侍る」などがある。

⑩あはぬ恋のころおほつかなくや―不遇恋の心がはつきりしていないか。右歌が、恋人に逢えない様子をはつきりと詠み込んでいないのではないかと指摘している。

⑪かやうの恋の哥、みなあはぬかほにはさしてきこゆる事侍らねは―不遇恋題においては、「夕行く雲のつかひにことづてんうはの空なるたよりなりとも」(『洞院撰歌家百首』恋・一一二四・「不遇恋五首」・家隆)、「おきつ風吹上の浜にみつ塩の空にもからき恋をするかな」(『洞院撰歌家百首』恋・一一二七・「不遇恋五首」・家隆)など、一見するとはつきりと恋人に逢えない状況を詠みこんではいけないが、雲や空を用いて、恋人と逢えない心情を遠回しに表現して題を満たしている例がみえる。

【通釈】  
二十七番

左 持

少将

逢うまで、といつて恋に（期待して）命をながらえる  
ならば、（今後）つらさを極めた人生を終えることにな  
るのだろうか。

右

円空

天の原、その美しく旗のようになびいている雲が漂い  
空に乱れるように、上の空になつて落ち着かなく乱れる  
恋をしていることだなあ。

【判詞】左歌は、心と詞が艶でございしますが、「うきをか  
きり」とございますのは、自然と逢うことがあるとして  
も逢瀬を遂げるものかと（言っているかのように）聞え  
得るところがあるでしょう。右歌は、「とよはた雲のた  
ちまよひ空に乱るゝ恋をするかな」とございまして、崇  
高壮大な格調高い様であつてそれほど負けるべき姿では  
ございせんが、不遇恋の心がはつきりしていないかと  
見えますもの、このような恋の歌は、全てが逢わない  
様子であるとはそれほど聞えることがございせんので、  
両首ともによろしい。持でございますよ。

〈二十八番〉

【本文】

二十八番

左 持

弁

恋しなむ命をいつのためとてかあふにかへすは残しと  
めむ

右

行家

ほしわひぬわか心なる涙にたれゆかりとてつれなかる  
らむ

左右ともにやさしくみえ侍れば、又可為持歟

【校異】

A ためとてか―頼めとて（書・内・家）

B あふ―あた（内） C とゝめむ―とゝめ□（家）

D たれ―たか（書・内・刈・河・家）

E つれ―□□（家）

【他書所伝】

〈左歌〉

『万代和歌集』恋歌二・一九六五・「不逢恋といふことを」

弁内侍

こひしなんいのちをいつのためとてかあふにかへすはの  
こしとどめむ

『題林愚抄』恋部一・不逢恋・六五四九・（河合の歌合）  
弁

恋ひしなん命をいつのためとてかあふにかへずはのこし  
とどめん

〔右歌〕

『題林愚抄』恋部一・不逢恋・六五五〇・「河合の歌合」・  
行家

ほしわびぬわが心なるなみだにたがゆかりとてつれな  
かるらん

【語釈】

① いつのためとてか―いつのためとてか―の意。「な  
かなかにちりなんのちのためとてかしをれし花のかほも  
はぢける」〔月詣和歌集〕雑下・七九八・「李夫人をよ  
める」・長方）などが例。

② あふにかへす―逢に代えず。逢うことと命を引き換え  
にしない、の意。「わが恋はあふにもかへすよしなくて  
命ばかりのたえやはてなん」〔式子内親王集〕一七七・  
「恋」）などが例。

③ 心なる涙―心にある涙、心の中の涙。「をしむともか  
たしやわかれ心なる涙をだにもえやはとどむる」〔拾遺  
和歌集〕別・三二二・「おなじ御めのとのせんに、殿上  
のをのこども女房など、わかれをしみ侍りけるに」・御  
乳母少納言）などが例。

④ たれゆかり―「たれ」は名詞「ゆかり」に続くため、  
他本より「たか」に改める。「いまはただねられぬいを

ぞともとするこひしき人のゆかりとおもへば」(二度本  
『金葉和歌集』恋部上・三五六・「從二位藤原親子家草子  
合に恋の心をよめる」・宣源)のように、涙が乾かない(止  
まらない)のはつれない(冷淡な)「誰」かのせいなので、  
「誰」かに縁があることとしてこのように表現する。

⑤ つれなかるらむ―擬人化した涙が「つれない」意の他  
に、相手が「つれない」の意も含む。「ゆかり(縁)」と  
「つれなし(縁がない)」を同時に詠み込んでいることも  
「縁」つながりか。「ゆかり」と「つれなし」を共に詠み  
込んだ例には「こぬひとのゆかりにあらぬとりのねもま  
ちあかすよはつれなかりけり」〔隆信集〕七八・「按察  
大納言十首の中に、夜恋を」がある。

⑥ 左右ともにやさしくみえ侍れ―両歌の優美さを共に評  
価する詞。「むかしみし跡ともみえずあれはてうづら  
なく野や深草のさと」、「秋はきぬ鹿はをのへに声たてつ  
よはのねざめをとふ人はなし」〔御室撰歌合〕秋・卅一  
番・六一、六二・隆信、有家)に、俊成が「左右共にや  
さしくをかしきさまに侍れば、いづれをとりわくべきに  
あらねば、よろしき為持」と判じたように「左右ともに  
やさし」とされる多くの場合が持を表す。

【通釈】

二十八番

左 持

弁

恋い死にをしてしまおう。命をいつのためだと思つて  
残し留めるだろるか、(あなたに)逢うことの代償とし  
ないならば(意味がないので)いつそ恋い死にしてしま  
う。

右

行家

乾かそうにも乾かなくて困惑してしまう。私の心の中  
(にあつて思うままになるはず)の涙までも、(つれない)  
誰かの縁だからといつて、(まるで私には縁がない、と  
いうように)つれなく乾かないのだろうか。

〔判詞〕左右(の歌)は共に優美に見えますので、(前の  
番と同じく)また持とするべきか。

〈二十九番〉

【本文】

二十九番

左 勝

甲斐

おもひねのよなく<sup>①</sup>かよふ<sup>A②</sup>夢ならてなとかうつ<sup>③</sup>のみち  
なかるらむ

右

為綱

なからふる身をいとひても玉の緒の逢にかふへきたのみ<sup>④</sup>

たになし

夜なく<sup>①</sup>かよふ夢ならて、うつ<sup>②</sup>のみちなき心えん  
に侍るめり、なからふる身をいとひても、あふ<sup>B</sup>にかふ<sup>C</sup>  
へきたのみなき心、すこし<sup>D⑤</sup>ことほりかなは

すや聞え侍らん、尤以左為勝

【校異】

A かよふーか□ふ(家) B あふにーあふ□(家)

C たのみーたのみたに(書・内・家)

D ことほりーとはり(家)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』恋部一・不逢恋・六五五二・「已上同(河合  
の歌合)一・甲斐

おもひねのよなよなかよふ夢ならでなとかうつ<sup>③</sup>の道な  
かるらん

〈右歌〉ナシ

【本歌】

〈右歌〉

『新古今歌集』恋歌一・一〇三四・「百首歌の中に、忍恋を・  
式子内親王

たまのをよたえなばたえねながらへばしのぶることのよ  
わりもぞする

【参考歌】

〈左歌〉

『古今和歌集』恋歌三・六五八・「(題しらず)」・小町  
夢ぢにはあしもやすめずかよへどもうつつにひとめ見し  
ことはあらず

【語釈】

①おもひね―恋しい人を思いつつ寝ること。「君をのみ  
思ひねにねし夢なればわが心から見つるなりけり」『古  
今和歌集』恋歌二・六〇八・「(題しらず)」・躬恒はその例。

②かよふ夢―「ゆきかよふ夢のうちにもまざるやと  
うちぬるほどのこころやすめよ」『千五百番歌合』恋  
二・千二百三十二番左・二四六二・良経)のような例が  
みえ、夢の中の往来する道を通う意。「夢かよふみちさ  
へたえぬ呉竹のふしみの里の雪の下をれ」『新古今和歌  
集』冬歌・六七三・「おなじ家にて、所名をさぐりて冬  
歌よませ侍りけるに、伏見里雪を」・有家)や「はかな  
しな夢にかよはむよなをかたみにそれと思ひなすと  
も」『拾遺愚草』恋・二六六五・「ひさしくかきたえた  
る人に」)などのように夢の中で恋しい人に逢うために  
往来する道を通うという趣旨のものが詠まれている。夢  
は現と対照された形で用いられる。

③うつゝのみち―現実で恋しい人に逢う道、の意。「う  
つゝの山うつつかなしき道たえて夢に都の人はわすれず」

(建仁二年『水無瀬恋十五首歌合』羈中恋・三十三番右・  
六六・良経)など。

④なからふる身をいとひても―本歌は恋心を忍ぶ力が絶  
えてしまうためにこれ以上永らえたくない想いを詠む  
が、当該歌は本歌の表現を發展させ、結局恋心を忍んだ  
ままで生き永らえてしまった想いを詠む。「おもふ事か  
なはぬみには恋ひわびていとふいのちもながきなりけ  
り」(元永元年『新中将家歌合』恋・十七番左・三三・  
顕雅)は叶わぬ想いを抱いたままで生き永らえてしまっ  
た心情を詠む例。

⑤玉の緒の逢にかふへき―この命を逢瀬と引き換えにし  
よう、の意。当該歌の「玉の緒の」は「なかなかにあふ  
にはかへぬたまのをのけきたえぬべきものをこそ思へ」  
『月詣和歌集』恋下・五六五・「(後朝恋のこころをよめ  
る)」・寛綱)のように枕詞の役割と命の意の両方を持ち  
合わせている。「逢にかふ」は「君はただ袖ばかりをや  
くたすらん逢ふには身をもかふとこそきけ」『拾遺和歌  
集』恋一・六七五・「返し」・よみ人しらず)のように恋  
しい人と逢うために命を引き換えにする意。

⑥ことりかなはず―一首に詠み込まれている内容が道  
理にかなっていないことを表す。例えば「山がはのした  
行くみづの下にのみ音こそたてねとしはふれども」(宝  
治元年『院御歌合』忍久恋・九十番左・一七九・経朝)

に對して、為家は「左山川のした行くとはいかに侍るにか、山たかみなどはききなれて侍る、河のみづした行くは、ことわりもかなはずや」と判じている。ここでは、上の句では生き永らえたくない思いを詠みつつも、下の句では生き永らえて思い人に逢いたい思いを詠んでいることが論理的に矛盾していると指摘するか。

【通釈】

二十九番

左 勝

甲斐

あの人を思いながら眠り、夜毎にあの人に逢いに行く夢（の通り路）ではなくて、どうして現実で（あの人に）逢うための道がない（逢えない）のだろうか。

右

為綱

（恋の想いを忍び続けて）生き永らえるこの身を嫌つても、この命を逢瀬と引き換えにできる頼みさえないことだ。（命を引き換えとすれば逢えるのだと期待する事柄さえないのだから実際に逢うことなどなおさらできるはずもない）

〔判詞〕夜毎に通う夢（の通り路であの人に逢う）以外で、現実で（あの人に）逢うための道がないという心情は優艶で美しいでしょう。生きながらえるわが身を嫌つても、逢瀬にかえようと期待する事柄さえないという心情は、少し道理にかなっていないように聞こえますでしょ

うか、いかにも左を勝ちとする。

〈二十番〉

【本文】

三十番

左 勝

能暹

おもひねの夢を此世の逢ことにたのむさへこそかなはさりけれ<sup>A</sup>

右

為繼

何せん<sup>B</sup>に身をなからへてうき人の心つよさのはてを待らん<sup>①</sup>

左、下句すこしうち<sup>③</sup>とけてや侍らん、右、心つよ

さのはてをなにせんになからへてみるらんと<sup>④</sup>

侍る心、いかにみるにか侍らむとおもひ、わきま

へかたく侍れば、左勝侍れかし

【校異】

A けれーけり（家） B 何せん<sup>B</sup>に身をなからへてう

き人の心つよさのはてを待らんーナシ（書・内）、哥落（家）

C 心つよさーこゝ□つよき（家）

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①うき人ー「うき人をうらみむこともけふばかりあすをまつべき我が身ならねば」『統詞花和歌集』恋下・

六四三・「題不知」・よみ人も）のように、こちらの恋情に対してつれない人のこと。

②心つよさのはて―「心つよさ」は、「いかにしてなほるばかりにこらしめん思ひにまけぬ心つよさを」(『堀河百首』恋十首・一二五・「片思」・国信)のように、「強情さ」の意。「はて」は「のこりなくちるぞめでたき桜花ありて世中はてのうければ」(『古今和歌集』春歌下・七一・「題しらず」・よみ人しらず)のように「終わり」の意か。「心つよさ」と「はて」を詠み込んだ例はみえなかったが、ここではつれない人の強情さの終わり、の意と思われる。

③うちとけて―「とをかあまりけふみかづきのかげきよみそらもさこそはときをしるらめ」(建治元年『撰政家月十首歌合』十三夜晴・三番左・道雲)に対する真観の判詞「左の十日あまりとうちいだされたるこそ、歌のやうにもきこえずや侍らむ、壬生二位うたに、長月の十日あまりのみかのはら、などつづけて侍るこそ、たくみにもをかしくもきこゆることにては侍れ、今の初句は無下にうちとけてぞ侍るらむかし」などの例から、下の句が歌語らしくない表現で、くだけていると難じたものと解する。為家は「かすが野をわけ行くひとの袖さえてみちもさりあへず雪は降りつつ」(宝治元年『院御歌合』野外雪・六九番左・一三七・定雅)について「左雪上句、

すこしうちとけてみえ侍るにや」と判じている。

④みるらんと侍る心、いかにみるにか侍らむとおもひ、わきまへかたく侍れ―底本も含め、今回校異に用いた諸本の右歌和歌本文は「待らん」であり、判詞の要約部分と合致しない。校異対象外の群書類従本では「見るらん」となっている。意味から考えると、「待らん」では相手の「心つよさのはて」即ち自分にいつか気持ちに向くことをこれから待とうかとなり推量「らん」も効果的だが、「見る」だと「心つよさのはて」即ち相手の気持ちが自分に向けられた前提で、その状態を見ようかとなり、「不遇恋」題とも適わず、推量「らん」も効果的ではない。判詞に「みるらんと」「いかにみるにか」とあることを重視すれば、判者の念頭にあつた右歌末句は「見るらん」であつた可能性が考えられる。推測の域を出ないが、為家が判詞を付すときにみた本文は「見るらん」で、為家はその本文で判じた為に、「いかにみるにか侍らむとおもひ、わきまへかたく」と記したものと一応考えておく。和歌本文を「見るらん」から「待らん」に改変したのは、出詠者、判者、書写者いずれの可能性も考えられるが、後考を俟ちたい。

【通釈】

三十番

左 勝

能 暹

相手を思いながら寝た夢を、この世で（実際に）逢うこととしてあてにすることはとうとう叶わなかったことだよ（そうするとあの人に逢えるのは後世だけなのだ）  
なあ）

右

為繼

どうして身を生き長らえてつれない（あの）人の強情さの終わりを待っているのだろうか、いや（強情さの終わりに来て）来ないだろう。

〔判詞〕左（歌）は、下句がすこしくだけていますでしようか、右（歌）は、強情さの終わりを何のために生きながらえて見るのだろうかとうございます（ですが）、どのように見るのでございましょうかと思ひ、理解しがたくなっていますので、左が勝ちでございましょうね。

〈判者卷末歌〉

【本文】

A① 色のふかき浅もわかぬ身に  
B② 色のふかき浅もわかぬ身に

④ いかゝたゝすのもりのこの葉―ナシ

【校異】

A そむる色のふかき浅もわかぬ身にいかゝたゝすのもりのこの葉―ナシ（刈・河）  
B 色―い□（家）

【他書所伝】

ナシ

【語釈】

① そむる色―和歌に見える情緒や発想を表す。「色にそむやまとことのはかさねおきて心のそこをとみにみえぬる」（『正治後度百首』七八八・「宴遊」・季保）などが例としてみえる。

② ふかき浅―歌境や発想の深淺の意。例えば『新古今和歌集』仮名序には「なにはづのながれをくみて、すみにごれるをさだめ、あさか山のあとをたづねて、ふかきあさをわかつてり」とみえる。為家は「よしの山ふもとの里の春をへてひと日も桜めかれやはする」、「泊瀬山さきそふ花の色みえてことしはふかき峰の白雲」（宝治元年『院御歌合』山花・廿二番・四三、四四・師繼、雅忠）に対して「その心いづれあさしふかし」と知りがたく侍れば、此番勝負不弁侍るべし」と判じている。

③ わかぬ―和歌のよしあしを判断できない、の意。「みやあしていくよへぬらむすみよしのまつふくかぜもかみさびにけり」、「よのなかをいとふころはさきだちていつまでとまるうきみなるらむ」（嘉応二年『住吉社歌合』述懐・十四番・一二七、一二八・経正、仲綱）に対する俊成の判詞に「いづれをまさると申すべしとはおもふたまへわかぬど、おほむ神にことかかれるにつきて、左のかちとや申すべからむ」とみえる。

④ たゝすのもりのこの葉―「たゝすのもり」は当該歌

合出詠歌「冬かれのたゝすのりの木のまよりみたらし  
川にやとる月影」（冬月・三番左・光成）や「神さふるたゝ  
すの杜の夕千鳥河瀬をかけて鳴わたる也」（千鳥・十二  
番右・真観）のように河合社が意識された表現。ここで  
は「人のおもひただすの杜のよぶこ鳥心のみやは空にし  
るらん」『俊成五社百首』賀茂御社百首和歌・一一四・  
「喚子鳥」のように「糺す」が掛けられており、具体的  
には歌の勝負を判定することを指す。「ことゝの葉」は「め  
にみえぬかみほとけのことゝのは」『新古今和歌集』仮名  
序）のように和歌を表し、ここでは当該歌合で読まれた  
和歌を意味する。「ことゝの葉」は「もり」の縁語。

【通釈】

（それぞれの）和歌に見える情緒や発想の深浅も判断  
できないこの身にどうしてよしあしを明らかにできよう  
かそれぞれに魅力を備えたこれらの和歌たちよ。

- あらい・さき 日本文学科三年生 —
- いのうえ・まゆこ 日本文学科三年生 —
- しょうぶ・みきこ 日本文学科四年生 —
- はつとり・まい 日本文学科四年生 —
- はまだ・ゆうすけ 日本文学科三年生 —
- みよし・ゆうき 日本文学科二年生 —
- よしい・さおり 日本文学科二年生 —